

第十一章 金石・物語・民俗・芸能

第一節 金 石

一 五輪塔・宝塔類

柳井谷石塔群

柳井谷に平景清の墓といわれる大きな五輪塔と大小さまざまな五輪塔がある。

景清は文治元年、壇ノ浦の戦で平氏滅亡後も生きのび、鎌倉幕府の平氏残党討伐の中で東大寺大仏殿供養のため上洛した源頼朝に降伏した。その後絶食して死んだというが、後世景清の勇猛さが喧伝され、淨瑠璃、謡曲などで創られた景清が誕生、地方へは主として琵琶法師たちにより伝えられていったと思われる。

石塔研究の立場から見ると、古いものは鎌倉前期と思われるものもあるが、景清の墓といわれる石塔は隅縁が六cmもあり、鎌倉前期のものではない。また、これは納骨塔であるが、この他にも納骨塔があり、最後は南北朝

時代のものである。

鎌倉から南北朝時代にかけて長い間、ここで生活してこれほどの石塔を残した豪族は誰であろうか。当時この地方で最も活躍した豪族は地頭としてこの地を領した肥後氏である。肥後氏一族である岩川氏は柳井谷に居住したが、ここは自然の要害の地で前方の菱田川は濠となり、東西は自然谷が断崖となって城となる場所である。

岩川氏は手取城を築城したが、南朝正平十四年（北朝延文四年＝一三五九）島津氏によって攻め落とされ、この地を去った。これほどの石塔を残した豪族は岩川氏ではないだろうか。

梶ヶ野石塔群

梶ヶ野の薬師堂の所に平安末期のものとと思われる五輪塔が三基（開田供養塔と思われる）、他に鎌倉時代から江戸初期のものまで五輪塔や宝塔など四十余ある。

応永年間のものと思われるが、人吉の相良氏庶流永留氏の宝篋印塔一基、戦国時代の肝付氏宝塔もあるがこの中に肝付系北原氏の二基がある。

また江戸初期梶ヶ野を開拓したといわれる乙名一族の禪宗系の墓塔群もここにある。

岩川地区のその他の石塔

元八幡石塔

元八幡の共同墓地に五輪塔が九基ある。戦国時代と推定される。

土成の石塔

土成の共同墓地に五輪塔が三基ある。戦国時代と思われる。

笠木照願寺の石塔

笠木照願寺にある石塔は、明治末期馬場から移したといわれている。肝付氏宝塔で戦国時代と思われる。



相良系永留氏石塔
(梶ヶ野石塔群)

浅井の石塔

浅井の広場に肝付氏の宝塔、五輪塔の残欠がある。開田供養塔と思われる一石五輪塔も発見された。

岩川竹山の水輪

岩川竹山の公民館の所に天台宗系の水輪がある。

恒吉地区の石塔

坂元の石塔

坂元字の勝元義隆氏所有の山中に肝付系宝塔一基と五輪塔五基がある。宝塔には「寛永十三年三月十三日為春慶」とある。ここは城跡である。

樋渡開田供養塔

坂元の樋渡の田圃から平安末期か鎌倉初期と思われる五輪塔二基が出土した。開田供養塔と思われるが、軽石製であり、大日如来の姿である五輪塔を建立し、豊作を祈願したものではないだろうか。

その他の石塔

坂元立馬の通学道路から少し入った所に軽石製五輪塔

徳泉寺裏の墓地にある宝塔

宮ヶ原の納骨堂にある肝付宝塔と五輪塔

下須田木の桑幡重治氏の墓地内の宝塔（肝付氏）

中須田木の寺脇幸一氏の墓地内の宝塔（肝付氏）

須田木千人山の麓や付近の五輪塔（青少年館に整理）

月野地区の石塔

岩元城跡の石塔

岩元城跡に五輪塔があつたが破壊されたので残欠を郷土館に運んだ。この地輪に建武五年八月二十七日「沙弥願阿」の銘があつたという。建武五年は暦応元年でもある。沙弥願阿とは時宗（浄土宗の一派）の法名で沙弥は生存を表わすことから、この石塔は逆修塔である。願阿とは当時三侯城主であつた三侯兼市のことである。兼市は肝付六代兼藤の弟で三侯城（現在の高城町）の城主になつてしたが、岩元城に陣を敷き戦つたことになる。

その他の石塔

太田尾に相輪が出土した。県道松山線開道の時埋没したものであるという。

市柴の道路上の山林に肝付宝塔と五輪塔群がある。又

この中に連碑が一基ある。

上勢井のオンズドンと呼ばれている上勢井城跡に五輪塔群が多数あり、納骨式も含まれている。

広津田の納骨堂横の竹林に肝付宝塔、五輪塔がある。

デンガ山と呼ばれている農協月野支所の裏山に肝付氏宝塔と五輪塔がある。また、ここには若松石見守の墓もある。

新留の墓地に相輪が一基ある。



デンガ山石塔群

宮ヶ原の北郷藏人の墓

宮ヶ原千人塚の近くに北郷藏人の墓がある。これは北郷久厦の墓で、永禄元年肝付氏との戦いで初めは北郷軍が優勢であったが、肝付に逆襲され、久厦は宮ヶ原で戦死したと伝えられている。

敗戦の将が戦死すると礼儀として甲冑を着用したまま埋葬し、これを將軍塚というが、この石塔は元亀元年と刻まれ干支もない。元亀元年はこの地は肝付の勢力範囲である。石塔の型は駒型で戦国期の型でなく、元禄ごろから出現した型である。「前北郷藏人頭 雲巻竜溪居士」とあるが前段の書き方からみても後世建立されたものと思われる。

石塔は記述外にも残欠を含め町内に散見されるが、肝付系が多い。

一 板 碑

頭部を山形に作り、その下に二段の切りこみ額部があり、身部の下に根部を作る板状の塔婆で、他に自然石板碑や舟形板碑などがある。板碑は卒塔婆の一種として発

生した供養塔である。板碑の形式はいろいろな説があるが平安時代の後期にあった角塔婆の形式を源流とするらしい。

仏を表わす方法として金銀銅石木を用いて仏像を作ったり、崖の岩に彫る磨崖仏、布や紙に絵として書く仏画や仏を字で表わす方法もある。板碑のほとんどは仏を梵字で表わしてあるが、密教の四有の思想にもとづいて十三仏を表わす。人が死ぬとその日から数えて七日目を初七日といい、二週目三週目と数えて七週目を四十九日とし、百日一年三年と年忌がある。この年忌ごとにお祈りをする仏が十三仏である。

十三仏

不動明王	初七日	観音菩薩	百日忌
釈迦如来	二・七日	勢至菩薩	一年忌
文殊菩薩	三・七日	阿弥陀如来	三年忌
普賢菩薩	四・七日	阿シユク如来	七年忌
地藏菩薩	五・七日	大日如来	十三年忌
弥勒菩薩	六・七日	虚空蔵菩薩	三十三年忌
薬師如来	四十九日		

空点のつく梵字には、その下に莊嚴点(飾り)をつけ



別府の板碑



判読不能

る場合が多い。

別府の板碑

別府の東台地は馬場城（岩河城）跡で南北朝期から戦国時代には島津氏と肝付氏の間で激しい戦いがあったところである。この台地の南端に通称七地藏とよばれている祠がある。この祠のことを「イボン神サア」ともいっている。

この祠のそばに軽石で作られた板碑がある。高さ八八cm、幅下部三六cm、上部三五cm、厚さ下部三二cm、上部一八cmで、身部の上に月輪がありこの中に梵字が彫っている。

この月輪をとりまくように左右下に梵字が九文字が彫られている。軽石のため磨滅激しく判読するのに困難であったが、密教の十三仏のうちの十仏であった。造立年、造立者はわからない。

上柵城跡の板碑

恒吉麓の東台地に城跡がある。恒吉中学校から南へ一kmほど行った所であるが、本郭跡は畑になり城跡であることを知る人もない。本郭跡の一部が檜山になってお

り、この山の中に板碑がある。石質は軟質の凝灰岩で高さ九六cm、幅下部三二cm、上部二五cm、厚さ下部三〇cm、上部二三cmで、身に虚空蔵菩薩を表わす梵字「タラ」とその下に五字大日真言の「アビラウケン」が彫られている。造立年等不明。

ここから三百mほど南の同山中に頭部が半円形の板碑があったので同所に移した。文字等ないが後世のものと思われる。

下須田木の角柱板碑

須田木青少年館（須田木小学校跡）に角柱板碑がある。石質は軟質の凝灰岩で、高さ一三二cm、下部四〇cm角、上部二七cm角、身部の中央に地蔵が彫ってあるが、廃仏毀釈のためか顔面はない。両手は合掌の印相をしているので宝性地蔵である。

この板碑は梶原一男氏の墓地にあったもので、梶原氏の先祖が造立したといわれる。近年道路拡幅によって、道路の上にあった板碑が落下したので、地区の人々により現在地に移動した。



角柱板碑（須田木）



上栴城跡の板碑

菱ヶ迫の板碑（その一）

大谷菱ヶ迫西迫尻にゲートボール場があり、この上の山に板碑がある。軟質凝灰石で高さ一一〇cm、幅二八cmで前面だけ加工してあり、側面、背面とも自然のままである。

額面下の切り込みは直線ではなく、垂れ幕の中央をしぼり上げた形の二条の切り込みである。上部に月輪があり、下部に蓮台が浮彫りしてある。刻字があるけれども全く判読できない。

菱ヶ迫の板碑（その二）

菱ヶ迫公民館から百mくらい行った道路の左側に中央に馬頭観音の石室があり、右に宝暦六年「觀世音寺」と刻した高さ四〇cmくらいの碑があり、左に月輪に「心」と刻した幅二五cm、奥行一五cmの板碑がある。下が折損して高さは四七cmしかない。折損部に刻字があったと思われる。

三六地蔵

地蔵が地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天道の六道

を廻りながら民衆を救うという信仰を六体の地蔵像に表現したものである。

川路山の六地蔵

川路山の三叉路の角に薬師如来の石室があり、その前に向かって右に石灯籠（享保十六年 竹下喜三右衛門寄進）と左に六地蔵がある。

六地蔵の幢身は六角で、正面に「奉造竜喜神」左面に「元禄十五年十一月八日」裏面に「□山市王」□は霧とも読める。他に二行あるが最後の「門」以外は判読できない。

龕部は六角に各面に地蔵が刻まれているが、顔面は全てき損している。廃仏棄釈の時、壊されたものと思われる。宝珠には火焰を表わす三つの隆起が縦に三本ある。

この六地蔵は、須田木への道の右側、川路山尾のカンゾにあった。近くに墓がある。カンゾには「霧島さあ」（矛・三叉）と六地蔵があったが、「霧島さあ」は日天子神社に移し、六地蔵は川路山へ移したのである。

薬師如来は石室屋形で、総高一七七cmで石室は六一cm×五九cmの角となっており、右面に「延宝六天午三月吉日」左面に「六宮仕富岡所左衛門 作者上山新左衛門」

と刻してある。石室の中には銅の薬師如来像が安置されており、高さ四七cmで裏に富岡但馬守と刻まれている。

この像は富岡家のものといわれ、以前仏像が壊れていたのを、京都の富岡氏に送り、修理して貰って送り返して貰ったという。昭和三十八年ごろのこと、現在は川路山部落で管理している。富岡家は当時、留岡武といい、須田木の人で京都で警察官をして、後実業界に入った。

なお、これらに隣接して十基程の石塔があり、安永六年に真方藤五左衛門寄進の石室や「唐仁町 林吉」の残欠、「大日神」「馬山神社」の刻字のものなどであるが、これらを含めて「早馬さあ」と呼んでいる。昔は馬の産地であり、各家でそれぞれに馬頭観音を刻んで奉納したのではないかという。以前は自分の家のものがそれぞれ決まっていたそうだ（岩切種道氏談）。部落では四月十五日に花見を兼ねて早馬さあの祭りをする。

下須田木の六地藏

下須田木の前原シズさん方の手前（長江寄りの方）左側の路の上に六地藏がある。他に地藏二体と円柱の碑（延享四年）、不動明王、修業大師、肝付系石塔の相輪残欠を祀る。

昔は今の位置より、川上の方に堂があり、又今も墓地があるが、ここにあった。昭和三十五年八月ごろここに移した。

幢身正面に梵字きんごうの金剛界五仏が刻まれ、右面に「寛文六天丙午□月十五日」、左面に「願以比功德普及於一切」、裏には「衆敬白」とある。庚申講衆であろうか。六面の地藏は顔面が壊されている。笠石は五輪塔のものである。

笠木の六地藏

笠木の「山ん神」の入口の所に六地藏がある。形は完全に整っているが、以前、蔦が巻き付いていたためか石が大分風化しており、六体の地藏の姿も明瞭でない。幢身にも刻字らしい窪みはあるが判読できない。六地藏である事はわかる。ところどころ石に穴があるが、こうした穴にはイボの神様ということで、イボの数だけ大豆を穴に入れる風習があるものであるが、笠木ではこの風習は聞かない。

古老の話では、昔から「ロクジゾウ」と呼び、葬式の時は、この六地藏をぐるぐる廻ったという。ここの六地藏も廃仏棄釈の時、取壊され方々に散らかっていたの

を、その後まとめて立てたという。

元八幡の六地藏

元八幡の黒岩家の墓地が、上水道の水源に行く道の左下方にある。この墓地はあまり広くなく、自然石の墓もあるが、ここに六地藏がある。幢身と蓮台がない。幢身がないので文字もない。もとは幢身があったのであろうが、高いと危険なため除いたものか、廃仏棄積の時亡くしたのか、いずれかであろう。

龕部の六地藏が顔面も含めて完全な形で残っているのは、廃仏棄積の時かくしたのかあるいは黒岩家は八幡神社の神職であったので見逃がしたのか、何れかであろう。ここの宝珠も川路山のものと同様に、火焰を象った隆起が縦に三本走っている。

川久保の六地藏

月野の太田神社の前の田圃に墓地があり、ここに六地藏がある。幢身と笠がなかったが、今回の再調査で笠は後に埋まっているのが発見され復元した。笠は六角形の反り型で差し渡し九〇cmの大きなもので、上の宝珠も直径三〇cm、高さ三六cmと大きい。幢身は見付からなかつ



元八幡の六地藏

た。全高一二八cmである。

龕部の六面に地藏が彫られているが、顔面は削られており、廃仏棄積の跡が歴然としている。幢身には「奉寄進六地藏右意趣女人観音講□□入奉造立為ニ世之榮也寛文十三年亥丑八月十四日 久保之□ 岩本 中村 飯屋宮□」と刻まれていたと記録にある。

広津田の納骨堂の所の小高い丘を「堂ン山」といい、付近を「堂ン下」という。この近くに、昔は墓地が十数个所あったというが、「堂ン山」にも、「堂ン下」にも龕部だけの六地藏があった。



別府六地藏

「堂ノ下」の六地藏には「禪定門□月十五日死去 妙連定尼 拾月十二日死去 十七年……造立」と刻まれている。これは昭和四十三年当時の調査で、その後、墓地在納骨堂式になり、改葬されたためか、この六地藏は二つともなくなっていた。

月野では、墓地によく六地藏をおいているが、岩永藤三氏の話によれば、昔は埋葬する時「六道巡り」といって棺を担いで、六地藏の廻りを六回廻ったという。

別府六地藏

岩川の別府の上の台地に板碑と石室がある。石室は屋

形型で、前面右側に「七世為……謹造立」、右側面に「飛ヶ別府門四右衛門」、左側面に「元禄十二天卯三月廿九日」とある。石室正面に縦に窓が二つあり、中の石に七つの像が刻まれている。中央上部に少し大きい一体と、その下に三体ずつ横二列に六体ある。昔から「ヒジッドン」（「七地藏どん」と呼ばれ、イボの神様として親しまれていたが、上部中央に阿弥陀如来（肉髻や印相で分かる）を配し、下に六地藏を配した供養塔である。

四 田 の 神

稲の豊作をもたらす神で、甑の底に敷くシキ型の笠をかぶり、手にメシゲ、梶、スリコギや稲穂を持った農民型が多い。武士型、僧侶型も稀にある。昔は田の神盗いの風習があり、自分の村が不作になると、豊作の村から田の神を盗んできた。その後、盗んだ村が豊作になると、田の神に酒や米俵等の土産を持たせて返しに行ったものである。

入角の田の神

広い田圃を一望に見渡す川の上の土手にある。「明和

二年酉三月 中之内村入角 内之牧長左衛門」と読める。右手にメシゲ、左手に腕を持って腰掛けている。

中須田木の田の神

川路山から須田木へ降りる道の三文字の所に円柱の前半分に田の神を彫り込んでいる。粗い作りで手には何も無い。安永六年五月六日の刻字があり、裏面から見ると男根を象っている。

下須田木の田の神

公民館の庭に立像の田の神がある。右手にメシゲ、左手に稲穂を持っている。この田の神の右に首がないので



下須田木の田の神

分らないが、石仏の座像がある。

春田の田の神

恒吉の農協澱粉工場の下に田の神の立像がある。刻字はされていない。高さは1mくらいである。

中大谷の田の神

大谷のバス停留所の恒吉寄り、川の近くに大きな田の神が座している。奉寄進 元治二年三月吉日 岩屋門新太郎 行年四十九才 とあるが、右手にメシゲと左手は笏みたいなものを持っている。あるいは稲穂のつもりかも分からない。

里脇の田の神

道路を下り公民館前で右へ折れて、川へ下ると、川の土手に田圃へ向かって田の神が立っている。素朴な作りで刻字はない。メシゲと笏か稲穂のようなものを持っている。

梶ヶ野の田の神

梶ヶ野の字葉師田には軽石で作った素朴な田の神があ

る。親しみのもてる暖かい田の神である。梶ヶ野には、この他に、やはり軽石製の田の神があったが失くなったと聞く。

坂元の田の神

坂元の字木場ヶ迫にある。石室型で安政四年八月吉日奉寄進立山喜右エ門 児島助八 永山徳助とある。

坂元では、この他に失くなった田の神が二体ある。一体は上坂元の観音寺跡の下に立っていた享保十九年の田上門と刻した気品ある田の神であったが、通称「びゅ」と呼ぶ田圃に向かっていた。もう一つは大正年代の作で蹲踞神社跡の東、百m位の土手上にあったが僧侶型であった。

広津田の田の神

月野の広津田公民館の奥に、高さ一二八cm、最大幅八五cmの大きな田の神の座像が、広津田の田圃を見守っている。右手にメンゲ、左手にスリコギを持っている。

このすぐ後に木立があるが、ここに霧島神社があった。これは明治四十四年か、大正四年のいずれかで、他の多くの神社等と共に太田神社に合祀された。



失くなった坂元の田の神

岡元の田の神

軽石できており、高さ五九cmの素朴な田の神で、手には何も持っていない。

志柄の田の神

新しい田の神である。排水記念として明治三十九年三月造られたもので地主福山吉武、小作人徳山市助、農業教師上屋武次など刻字されている。川向うは松山町の野久尾である。

西鍋の田の神

西鍋の田圃の中に田の神がある。年代不詳である。上島田字にあったものを笠木新田ができたので、ここに移したというが、高さは台石共三九cmで像と台石は一体である。

この田の神は笠のかわりに頭にターバンみたいなものを巻いた形にみえる。右手に笏か剣（先端が欠けている）を持ち、左手は下におろした立像で一般の田の神型ではない。

東鍋の田の神

県道から東鍋の永山雄吉氏宅への道路の入口左角の野村信夫氏畑に幅一六cm×一一cmほどの石が祀られている。上部は折損しているので高さ三〇cmとなっているが、山神田字から移した田の神であるという。（益永甚蔵氏談）表面は荒れて像も字もない。イボん神として昔よくお詣りする人を見たものである。（西本俊子氏談）

桂の田の神

桂の吉永善一氏宅に軽石の田の神がある。高さ四〇cmくらいで右手にメシゲ、左にスリコギ様のものが凹形に

彫っており、裏に八年三月とある軽石製である。笠の形からみても河童形と名付けてよさそうな面白い形である。昭和八年、月野の地之上権八が刻んだものを吉永氏が貰い受けたものである。

西笠木の田の神

西笠木の鮫島繁氏宅に軽石製で高さ四八cmの田の神がある。メシゲか稲穂かを横に両手で持っており、右下に「田ノ神」と刻んである。以前居住の駒山から移転したものである。

荒谷田の神

荒谷の山重太吉開田記念碑の右に昭和四十六年三月の田の神がある。右にメシゲ、左にスリコギ様のものを持っている。

内山の田の神

稲穂とすりこぎかメシゲかを持つ。柔和な顔である。

五 その他の金石

月野下岡の経筒

大正六年四月、月野村下岡、左近充家の後方の小丘から経筒が出土したことについては、第四章第五節にあるから、その方を読んで頂きたい。筆者は東京博物館で現物を見せてもらい、調査をして来たので、その点を記し更に当地方の経塚の変遷について考えて見たい。

東京博物館を筆者が訪ねたのは昭和三十七年十一月であった。月野の経筒は陣列してないで、倉庫の奥に蔵ってあった。出土品は経筒、玻璃玉、鉄鏃、短刀、鋒形金具であった。これらの出土品は大正八年五月十四日鹿児島から購入したと台帳に記録され、それぞれの価格が記入されている。各出土品について、調査されている事項を次に述べる。

経筒

青銅製鑄物、被蓋付、総高九寸六分、蓋高式寸六分

匣、口径参寸七分五厘、小破孔式、側面刻銘。

玻璃玉

拾壹個、綠色ノモノ九個、白色ノモノ貳個、破損セルモノ貳個、径式分乃至参分。

鉄鏃

腐蝕、破損、長四寸九分

短刀

式本、鉄製、腐蝕欠損、壹、長六寸式分、長四寸五分。

鋒形金具 壹個

鉄製、三又形、諸所欠損

長四寸七分、鉄製金具破片長式寸三分壹個添

この三又形の金具は、金質が鋭利で、やはり実用にも使用したものと思われると博物館では説明があった。

左近充家では経筒の出たあの丘の上にろうそう桑を植えていたが、それが古株になったので、植かえようとして掘りかえしたら地中から木炭が出て来た。そこは草もよく生えなかった。そこでもう少し深く掘りかえして見たら、経筒が出て来た。これは宝物だと一時思ったが、その当時左近充家では次々とつまずいた。長男が精米所（水車）で事故で死んだ。満洲に行っていた息子が徴兵検査に帰る時、汽車で死んだ。その次の息子は霧島で変死した。こうした不幸続きの中に出土した経筒は宝物どころか、こんなものがあつたからつまずいたのだと早々

に手離し、経筒は志布志へ行った。

(筆者＝高木秀吉氏)

経筒出土の丘は、国道二六九号線のバイパスと県道四九五号線(志柄・宮ノ原・福山線)の交差点に当り昭和六十二年に破壊された。

久木山の経塚

久木山部落の小高い段の旧道の右側に、高さ一・五m、三m四方位の小丘がある。この小丘はもとはもっと大きく恐らく八mくらいの広がりをもった丘だったという話である。昔からこの丘は「さわる」と言われていたので周囲の耕作者も手をつけなかったが、いつの間にかきりとなって耕作することになり、今は小さい円丘になってしまった。

丘をきりくずして畑にする時、はじめは別に異状なく盛土であったが、最近になって、小石の一団が出て来た。それは現在切りとってある所の少し手前の辺りであるが、その小石に文字が一字ずつ墨書してあるということであった。この話を鮫島利雄氏が聞いて、経塚であることがわかったのであった。

現地を調査して見ると、小石が沢山円丘の所や畑地に



久木山経塚

散らばっている。その中から「而」「相」など記した小石が発見された。大体は普通の川石で文字は消えて残っていない。

円丘の上に、五輪塔の上部、空輪、風輪のところと思われる部分が残っていた。ここにはまだ別に石があったそうだが、子供の頃、転ばしてどこかへやったという人の話も残って居り、この地に五輪塔のようなものがあつ

たこともわかった(初版当時)。

この一字一石経塚は川原石の小さいのに経文を一石に一字ずつ墨書あるいは朱書して埋納したものである。起原は鎌倉時代以降といわれ、経塚造営を一種の功德業と考えるようになってからの所産であろう。室町時代から江戸時代にかけて、大いに流行した。文字を記した小石の数が少ないのと、時代のわかるようなものがないので、ここのは何時代かははっきりしない。

この経塚のある位置は、前述のように小高い所の頂点にあり、したがって見晴しもよく、南に高隈山、北に高千穂が望まれる。この辺りに昔お寺があったことはないか、何か寺に関連したものはないかと調査したが、別にそういうものはないとの話である。また、経塚の上にある五輪塔の空輪風輪様のものについて、附近に墓地はないか調査したが、部落の墓地は遠い谷向うにあり、この辺りに墓地はないことを確めた。経塚の上には、五輪塔や宝篋印塔をたてた場合もあるので、恐らく此処の経塚にも五輪塔あたりが建っていたのではないかと思われる。

大隅町の経塚

月野下岡に経筒が出土したが、この経筒は長治二年十月で、西暦一一〇五年に当り、平安朝時代である。

久木山部落に経塚がある。一字一石の経塚であるが、附近にお寺のあった形跡もなく、久木山では一番高い丘である。この経塚は割に古い時代のものであらうと考えられる。

神社寺院内によくある一字一石の経塚をさがしたが、大隅町内には発見出来なかった。末吉の山口神社境内に一字一石が出土して、今は檜神社にある。最近末吉の上之馬場に一字一石塔を発見した。年号が、「文化四丁卯九月吉日」と刻んである。

月野の経筒は側面の刻銘によって、経筒として最も古いものに属する。弥勒菩薩が五十六億七千万年の後に、この世に現れ、釈迦の救済からもれたすべての衆生を救うのであるが、その時経典がないとまずいので、こうして経文を経筒に入れて、その時まで保存しようという。平安時代末法思想の中でこの考え方が生まれ、経筒が出来た頃のもので経筒に経文を保存しようという最初の思想である点、この経筒は貴重な意味もっている。その後、鎌倉末期から室町時代になると、俗信仰に結びつい

て、經典を写すことによって、現世來世の安寧、一家の繁栄や亡き父母肉親の冥福を祈るためのものに変わっていった。室町時代にはお寺から遠く離れた高い丘の上に、経塚を建てた。その後、徳川時代になると、お寺の庭先に経塚をつくった。

月野下岡の経塚も、出土した所にお寺があったわけではなく、人里離れた小丘の上につくったものと思われると博物館では説明された。下岡経塚の麓に広津田の堂ノ山という、別の小丘がある。ここに堂があったというが、ここからすぐ眼の前の下岡の上に経塚がつくられたのではないだろうか。

こうした経塚の歴史を考えると月野下岡の経塚はもちろん、久木山の経塚も相当古いことが考えられる。後世になって各地にある神社寺院の庭の経塚になってくることが考えられる。

古 鏡

鏡は姿を写す用に使われた外に、神社では御神体、宝物とするところが多く、また上古では墳墓に副葬品として、経塚の埋蔵品とした。鏡は形に差異があるので、それによって年代を区分することができる。

我が国の上古時代のものは、支那の漢の時代に盛んに行われた鏡の様式で、支那から輸入したものと、我が国で模作したものとがあるが、いずれも漢鏡の流れであるから漢式鏡と呼ぶ。奈良時代のもものは、支那の唐代のものを受けたから唐式鏡といい、平安時代以降は漸次日本化し、支那鏡の俤は全くなかったものが徳川時代まで行われたが、これを和鏡と呼んでいる。

鏡の質は、白銅鏡、銀鏡、合成銅として白目、響銅、純銅、青銅、黄銅、黒銅などがある。鏡の形は漢式鏡は円形、唐式鏡は円形の外に菱花鏡、葵花鏡、方形等があり、和鏡になると円鏡が一番多く、足利時代の末期に支那の宋鏡の手法を受けて、柄鏡が行われはじめて、徳川時代はほとんどこの柄鏡であった。

鏡は鏡面の裏すなわち鏡背に種々の図紋や鈕があるが、それによって年代も解るのである。鳥獸葡萄鏡、唐草獅鳳八稜鏡、瑞花鴛鴦八花鏡、菊水雙鶴鏡、瑞穂柄鏡等鏡背の図紋をあらわしている。

前述の柄鏡は古老の話によると、明治十五年ごろまでは一般家庭で使われており、時々「鏡とき」が廻って来たという。

大隅町の古鏡は多くはないが、飯田の松下静方や太田

神社などにある（以下、古鏡の説明は宮崎博物館栗原文藏氏による）。

松下静所蔵の鏡は二面であるが、その一つは漢式鏡「神人竜虎画像鏡」の仿製と思われる。仿製というのは模作のことである。製作時代は古墳時代。直径一・五・八cmの大きな鏡である。他の一面は和鏡で「亀甲地雙雀鏡」（直径一・一・二cmで、南北朝時代のものである）。

この鏡の発見されたのは飯田開田の時（明治二十七年完成）ではないかと言われる。静の父喜次郎が、現在の飯田公民館の道越しの前方の所、当時山林であった所を開墾する時、この古鏡が出て来たという。この場所は昔神社（お寺ともいう）のあった所で、西南役の時焼失、その跡に学校が出来た（岩川の飯田分校）。現在は田圃である。古鏡にきずがあるがこれは開墾の時山鋏があったあとだという。

太田神社所蔵古鏡は、全部で十七面あるが、その中六面は鎌倉時代、南北朝時代のものである（古鏡名の上の「第何号」というのは、神社所蔵番号である）。

（第四号）「菊花雙鳥鏡」（鎌倉時代）

直径一一・二 $\frac{1}{2}$ cm 高さ九・五 $\frac{1}{2}$ cm 重さ四三〇g

（第十二号）「梅花雙雀鏡」（鎌倉時代）

直径一一・四 $\frac{1}{2}$ cm 高さ七・二 $\frac{1}{2}$ cm 重さ二一〇g

（第八号）「梅花雙雀鏡」（南北朝時代）

直径九五 $\frac{1}{2}$ cm 高さ九・五 $\frac{1}{2}$ cm 重さ一二五g

（第十号）「菊花紋雙雀鏡」（南北朝時代）

直径九八 $\frac{1}{2}$ cm 高さ八・二 $\frac{1}{2}$ cm 重さ一七〇g

（号なし）「菊花雙雀鏡」（南北朝時代）

直径八八 $\frac{1}{2}$ cm 高さ七・九 $\frac{1}{2}$ cm 重さ二〇〇g

（第七号）「亀甲地雙雀鏡」（南北朝時代）

直径一二〇 $\frac{1}{2}$ cm 高さ八・四 $\frac{1}{2}$ cm 重さ二三〇g

右の外に「天下一鏡」一面と残りは蓬萊鏡でいずれも後世のものである。

川路山の小原進所蔵鏡も「天下一」であるが、後世のものは町内に多い。

山口家の鎧

中之園の山口長至方に鎧が二つある。山口家は藩政時代西千石馬場にあった伊勢家の屋敷内に居住し、伊勢家の重臣で、明治初年岩川郷建設の時岩川へ移って来た。

鎧の一つは緋絨し、金具に黄金が入り、胄に金色の輪がつき大将鎧と言われている。弥五郎どん祭りの時、た

まに着用して出たことがある。着用者は山口家の一家の者に限られていたが、これは付属品の散逸を防ぐためであった。もうひとつの鎧は黒緘しで、冑がない。

内山の入定窟

内山部落の内山栄蔵氏宅の手前に墓地がある。崖が崩れて墓石などが埋まったままというが、狭い敷地に数基の墓石が並んでいる。その後には肝付氏の相輪や、変型卵塔型とでもいうようなものなどある。なお、ここには観音堂（一間×二間）があり、内山家で祭っていたが廃仏毀釈の時なくなったという。



内山の入定窟

この中で向かって右から三番目は、下が半地下式の石室で九〇cm角、壁の厚みは一五cmくらい、中が空洞となっている。石室の天井は地表から六八cmくらい、その上に台座が三段にあり、塔身がのっている。塔身は三〇cm角で、地表からの高さは一八五cmある。

中央に地藏を刻み、右に「了山淳知神男」、左に「正徳六申二月二十五日」とあるが、型からみても入定窟と思われていたが、内山亨氏は祖父から「生きたまゝ墓に入つて仏になった墓」と聞いているので、間違いなく入定窟である。

入定窟とは、僧が生死を超越した世界に入るため、所謂禪定に入るための石室で、ここで生きながら往生するのである。県内には志布志や国分など数ヶ所入定窟が残っている。

この入定窟を挟んで、天和三年、元禄十二年正月十日（恵芳妙智大姉）、享保十一年三月二十七日（□□道求神男俗名持右衛門）の墓は真言宗の墓と思われる。諸仏の通種子といわれる梵字マが刻まれている。また、正保二と読める墓石もある。

愛宕さあ

愛宕は王城鎮護、火伏せの神とされているが、大路の砦跡に「享保二十歳乙卯三月□□ 奉寄進 □上一字」、側面に「松橋十七□」の石碑があり、愛宕さあと呼ばれている。

坂元早馬神社の裏山、字松尾の突端に石室がある。笠と塔身の一部が残り、「明治四年未九月廿四日 浦川内 式才中」と刻まれている。ここは城跡であり、石室以前にも愛宕が祀られていたのであろうか。昔は正月お詣りしていたというが既に忘れかけられている。

石 敢 当

石敢当は中国の民俗で魔除けとして三叉路や交差点、袋小路のつき当たりによく建てたものである。晋の勇士の名とも言う。古書に「敢當所何無敵也拋所説則世之用此亦欲以為保障之意」とある。また「石敢當は百鬼を鎮め、災殃を圧す」ともある。

岩川の官軍墓地の下、国道二六九号線を越えた辺りに旧道があり、ここに石敢当があった。現在（昭63）野口民夫氏宅の裏になるが三文字の突当りに立っていた。宅地造成により現状が壊されたので、石敢当だけ郷土館に

保管したが、高さ四一cm、最大幅一八cm、最大厚一一cmある。

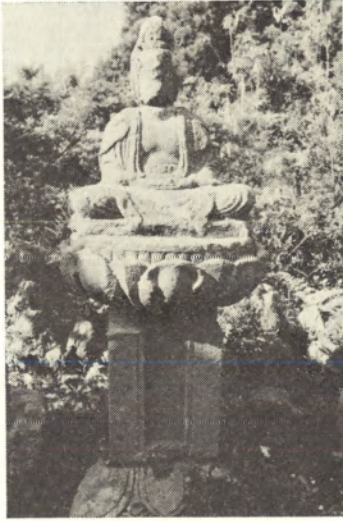
恒吉の麓橋の手前の右側に、高さ五〇cm、幅二一cmくらの石敢当がある。石當敢と彫られているが敢か散かはっきりしない。県内にこのような誤刻が散見されるが、要は魔除けであればよかったのであり、むしろ貴重な民俗資料である。

石 仏

上坂元を西へ下ると田圃がある。通称「びゅ」というが、手前の高台に観音寺があった。境内に石仏が二体ほどあったが、保存のため、大平勝海氏宅に移した。一体は観音菩薩像と思われるが右手に蓮の葉を持つ座像で蓮台の下の塔身に「本源自照智蔵 享保十年」とある。他の一体は毀損して判別し難い。

下須田木公民館に田の神と並んで、石仏の座像がある。首がないので、頭をセメントで作って継いでいるが、廃仏毀釈のためか不明。台座に「宝曆四年十月二日」の他「城、六、門、田、仲」などの字が拾い読みでききる。

伊屋松公民館の道路越しに、元禄七甲戌八月吉日の奉



本源自照智蔵 (坂元)



石敢当 (恒吉)

寄進 伊屋松門藤左エ門と刻まれた棹石があり、この上に高さ三〇cmの地藏がある。台座に「朝錫命而夕有終水欲静而不寧 伊藤氏女」とあり、背面に文政十丁亥七月十六日とある。

浮彫りは多いが下須田木の六地藏と並ぶ舟型浮彫りの地藏は大きい。

その他の碑

石碑、石塔は町内に多数あり、由来不明となったものも相当数あるが、その中から主なものを記しておく。

新城の軍神碑

新城の国道二六九号線から少し入った山裾に「軍神ド
ン」と呼ばれる石碑がある。高さ六五cm、幅三六cm、厚
さ一四cmの駒形である。もと字城山にあったものを山裾
に移したという。

正面上部に梵字マニ、その下に軍神と刻まれ、下には蓮
台が刻まれている。これを挟んで右左に「貞享四天丁卯
十月吉日」、左右側面に「田之上中原」と「結衆 敬白加
藤氏□清□」とある。貞享四年は明けると元禄で華やか
な時代である。この時期に軍神が必要であったのだろう



新城軍神碑

か。上の梵字は文珠菩薩を表わすから文珠信仰である。蓮台には像がのるのが一般的であるが、あるいは像を削って軍神と追刻したとも考えられる。追刻であれば、それは廃仏毀釈の時だろうか。

元八幡の梵字塔

八幡神社の神官であった黒岩氏墓地には、六地藏の他に供養塔が数基あるが、その中に二基の梵字塔がある。胎蔵界大日如来を表わす「^{キヤカラ}アハ

るのは、高さ四六cm、幅四〇cmある。五字大日真言の「^{アビラクン}アハ」が彫られているのは高さ五〇cm、幅二

七cmある。何れも舟型の供養塔である。この他舟型地蔵もある。

持留の石塔

月野の持留坂、国道二六九号線の曲がり角に、江戸時代のものと思われる石塔がある。凝灰岩の自然石で高さ一三五cm、下部の幅五七cmで、上部は次第に狭くなり三角状となる。前面上部に胎蔵界大日如来を表わす梵字^ア、下に法印快峰と刻まれ、左下に中野門賀八と彫られている。法印は僧であるが、江戸時代持留にはお寺があったという。

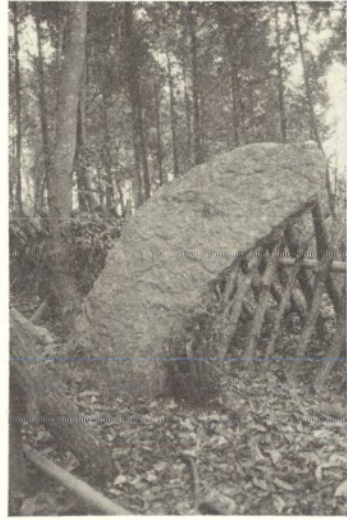
向えん丘の石碑

月野の太田神社の南、岩元から見て向えん迫と呼んでいるが、そこを登っていくと手前の小丘に馬頭観音（天保二年三月）があり、そこを過ぎた別の丘、字前平に烏帽子風というか弧状の巨石がある。

地表の部分だけでも長さ一八〇cm、最大幅六五cm、厚さ一七cmある。斜に少し倒れているが、それでも高さ一二〇cmあり、中央に十数cm角ぐらいの刻字と覚しき部分が三ヶ所ほどあるが、何のために建てられたか、言い伝



松田の石塔



月野向えん丘の碑

えもない。

松田の石塔

松田から運動公園への坂道の左手に墓地があり、その裏の土手に天明三年卯九月廿八日の石塔があり、墓地入口に移した。中央に梵字^マと権大僧都法印綱實と刻まれ横に不動院とある。刻字の下に右手に錫杖、左手に経巻を持った像が浮彫りされている。像は腰掛けているようである。上の運動公園を含む一帯は城跡で、ここは古い墓地跡であるが、不動院という真言宗の寺があったと思われる。

ここから県道を距てた西の方に今は削られているが小さい高い丘があり霧島さあが祀られていた。

大隅警察署前の石

大隅警察署の国道を越えた田圃に巨大な自然石が立っている。長方形の側面上部が横に半円形にえぐれて、大きく口をあけたみたいになっている。田圃の所有者もその由来を知らない。

紺垣の馬頭観音

紺垣に小丘がある。丘は六、七〇cm程削られ平らにして四体の馬頭観音がある。石塔、石室と形は種々であるが、全て馬頭観音と呼んでいる。この中の入口の一基は自然石の板石で一部欠損しているが、最大厚一七cm位の五角形みたいな形をしている。最大長さ一〇〇cm、最大幅八〇cmくらいで蓋のつまみ様の直径二〇cmくらいの突起もある。五、六個の板状の角石の上のっている。丘を削った時、地中から出たのか、最初から地上にあったものか地元の人たちも知らない。支石墓に似ている。古墳説（小幡晋氏）もあるが、発掘以外に確認できない。



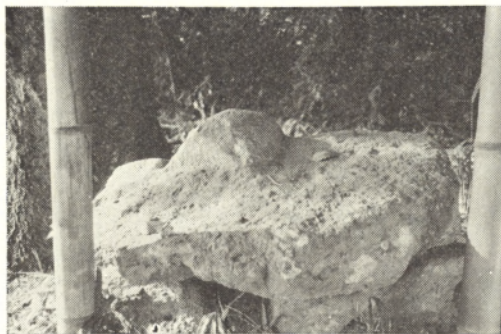
警察署前の石

なお近くに縄文の土器や石器が数多く出土する。

第二節 物 語

松尾田の浅どん

月野の浅どんは、今は大隅町に入った旧月野村の松尾



紺垣の馬頭観音

田部落の人であった。浅どんの子孫は現存しており、その墓地には自然石の墓石が残っているという。当主は秋田貢さんといひ、農業のかたわら、木引きもしている。当主の祖父四郎左衛門の時代、厩を造ったが、その厩の後桁は浅どんの山おこ（荷ない棒）であったといわれていた。また月野に平川という家があるが、その庭に大きな庭石がある。それも浅どんがかついで来た石だといひ伝えている。浅どんは身体が非常に大きかったし、力持ちでもあったのでこんな話が生まれたものらしい。なお、浅どんは当主の祖父四郎左衛門の更に三、四代前の人らしいということである。

欲しもんもきばれ

主婦は浅どんにはなかなか御馳走を喰べさせなかつた。主人たちが御馳走を喰べるのをいつも見ながら、自分に残りものですまきねばならなかつた。浅どんはそれがくやしかつた。

御馳走の廻らなかつたある日、浅どんは厩に入っていた。そして馬の好物のまぐさを縄でくくると、それを馬の頭の上の高い所につり下げた。馬はまぐさがほしいので、首をもたげて喰べようとすののだが、なかなかと

どかない足を掻いたり、いなないたり、せまい厩の中で大騒ぎしていた。

浅どんは心地よさそうにそれを見て

「まれけんにゃ欲しもんもきばらん……」

三匹の馬

浅どんは馬を三匹ひいて、いつもの草場に行った。そしてそこにあつた一本の松の木に三匹ともいっしょにつないでおいた。草はよくのびていたが、何しろ三匹いっしょなので、その辺りの草はすぐ喰べてしまった。

そこへ主人がやって来た。みるとこのありさまなので、「馬は別々につなぐもんじゃ」といってきかせた。

あくる日も浅どんは馬を三匹ひいて、草場に出かけていった。そして一匹は字尾の丘（今の有明町伊崎）までひいていってそこにつないだ。

それから浅どんはあと一匹をひいて松山の丘（松山町）にいつてつないだ。それから残りの一匹をつれて、月野の国見が丘にいつてその草場につないだ。その時はもう昼下りになっていた。さて浅どんは馬を三匹別々につないで松尾田へ帰つて来た。しかし馬をつないだ場所が遠いので、月野へ帰りつくとすぐ引き返して三匹の

馬をつれ戻しにいかねばならなかった。もう陽は傾きかけていた。

麦 飯

浅どんは麦飯がきらいであった。主婦はそれを知っていながら、麦飯を食べさせた。浅どんがそれを見ていやな顔をしていると、「まれけんにゃ好かんもんも喰わんにゃ……」と、主婦が叱るように言ったので、浅どんは我慢しいしい麦飯を喰べた。

そのあと、浅どんは馬を五、六匹ひいて、まぐさ刈りに行った。そこでまぐさにきったのが、杉の葉、松の葉などそれをいっばい馬の背に積んで帰って来た。そして馬のふねに松の葉、杉の葉をいっばい入れて、馬に言った。

「わいどんもまれけんな好かんもんも喰わんにゃ……」

米 の 飯

浅どんが畑を打つのに、主婦こじゆが米の飯を炊いて持たしてやった。米の飯がまわったので、浅どんは元気が出て、大いに働いた。仕事もふだんの倍ほどして帰って来

た。そこで主婦が浅どんに「こら、仕事ちゃ飯じゃ、飯が仕事つする」といった。

翌日、主婦はまた浅どんに大いに働いてもらおうと思つて、弁当に米の飯をつめて持たしてやった。畑に行つた浅どんは、鍬をそこへおくと、鍬の柄に弁当をくくりつけた

「米の飯が仕事つする」

そして自分はそこらで遊んでいた。

白の引き手

浅どんは気の早い人であった。草刈りにいくのに、鎌と間違えて白の引き手を持っていった。(白の引き手は形が鎌に似ている。)浅どんは草場に行つて、いよいよ草を刈る時になって、それと気がついた。間違えたと思うとしゃくにさわったので、白の引き手をぶーんと谷底へ投げすてたそして手早くそこの草を素手でかなぐりきつて、帰ってきた。

おなめ牛が三声

浅どんはよく働いた。夕方もおそくまで働いて帰って来た。あまり帰りがおそいので、主婦が、「働くことは

いいが、おなめ牛が三声おろだ時やもどいもんじゃ」と言ってきた。

翌日、浅どんは畑仕事に出かけていった。仕事をはじめていると、間もなく牝牛が三声鳴いた。浅どんはそそくさと帰っていった。

縄 ない

浅どんに明日縄がいるから縄をねっておくと、親方が言った。そこで浅どんは夜つびて縄をねった。朝になって、縄をとりて来た親方はびっくりして、困った。何しろ縄の束が大き過ぎて、戸口から出せないのであった。

まっすぐ帰れ

浅どんはどこか遠い所に行った時、道草しないでここからまっすぐ帰れと親方が言った。浅どんは言われた通り、丘にのぼり谷に下り藪をわけ、川を渡り文字通りまっすぐ帰って来た。着物はひきちぎれ、泥にまみれて帰って来た。

鹿兒島に行く

浅どんは鹿兒島に行くことになった。握り飯をもって

いくのが面倒なので、一週間分一度に喰ってそれでもう握り飯はいらぬといつてさばさばと出かけて行った。

大保熊太郎

福山牧の木戸番をした大保金蔵の甥にあたる大保熊太郎は、二重堀侏儒と呼ばれ、若いころ頓智者であった。

熊太郎は明治十三年一月四日生れで、昭和三十八年二月二十一日死亡した。

熊太郎はある日二重堀の店に行った。店先に立って「あすこに一寸二分が来る」といったので、店の者は何のことだろうと店先に出て見ると、巡礼（六部）が二人こちらへ近づいて来るところであった。（六部を六分に置き換えた）

熊太郎は焼酎が好きであった。ある日友だちと割勘で焼酎を飲むことになったが、焼酎が少ないので、熊太郎はなんこをしようと言った。なんこがはじまると、熊太郎は相手からあてられた時だけ手を開いて見せ、あたらない時でも「しもた」と言つて焼酎を飲んだ。結局勝つても負けても一人で焼酎を飲んでしまった。

熊太郎は肉の行商をしていた。ある家の前を通り過ぎてから、その家の人が出て来て、「あと帰^げつて来て呉い

「やい」と呼んだ。熊太郎は振り返りながら、「後月あとげちや来やならんが、今なら来がなっどん」といった。

熊太郎の家で藁切包丁の使い古しでもう使用出来ないようなのが出て来た。息子は「鍛治かか」どんでかけっくかい（刃をわかしつぎすること）」と言ったら、「ちきい（秤）でかけんか」と言った。

熊太郎が手品をしてみせようと言った。友だちに茶碗をもたせ、柱の前に立たせ、その茶碗を手にふれないで動かしてみせると言うのであった。熊太郎はきせるで一方から照準を定めながら、「もう少し下でない駄目だ」「いやあまり下がりが過ぎた」と言いながら上下させていたが、一向に手品が始まらない。そこで友達は腹を立てた。熊太郎は「もう動いていないか」と言った。

ある日熊太郎は店に飛びこむと、「一間半をくれ」と言ったが、店主には何のことかもわからない。熊太郎は店内を物色していたが、「ここにあった」といって杓をとりあげた。（杓は二重堀方面では「くしゃく」とも言うので「九尺」を意味する）（大保良道氏談）。

黒葛原七

黒葛原七くろくわはしちはほんとうは七右衛門とか言うのだろうが、通称黒葛原七と言っていた。

谷山の中村あたりは柔道やわらの盛んな所で、この辺りの若い者は皆やわらの稽古をした。そのため後には谷山の麓にも負けないようになった。谷山麓の人たちは剣道はよくやったがやわらはあまり稽古しなかった。中村あたりは百姓なので百姓がやわらをするのをきらった。中村の百姓たちがやわらの稽古をすると、谷山麓から打ったくいけやって来た。そこで中村の方では、それを防ぐために所々におとし穴を掘ったり、辻々に番人をおいてけいこをした。

黒葛原七は夜、やわらの稽古に行った。朝になって御飯をたべる時も、ふらふらと眠りこけるので、七の父が夜おそくまで遊んでいるから眠るのだと叱ったところ、七はやにわにお膳を持って、家の梁にとびのったという。これほどまでにやわらの稽古をしているのなら仕方ないと言って、それからはやわらの稽古をするのを許したという。

七は畳を蹴上げるのも見事であった。これは敵に対する防禦の技であるが、畳を蹴上げて、ひとつ所に積んだ

という。

七は少年のころ、馬をひいてよく鹿兒島に出た。当時清水町あたりにやわらの道場があったが、七はそこへ行って、馬は放っておいて道場をよくのぞいていた。兵児たちがあの子はいつも来て見ているが、稽古をさせてやろうかといって、とうとう稽古をさせることになった。もちろん兵児の方では最初は面白半分であったのだから七はぐんぐんと稽古がいつ、後には一番弟子もやつけるくらいに上達した。

その中七が成人すると、相当名も知られて来たので、兵児たちの間で、あの七を何とか片付けなければ、道場を一番弟子にゆずらねばならない。そこで高弟が師匠にたのんで七を私に下さいと頼んだ。師匠も仕方なくそれでは君たちが七をとることが出来ればくれてやろうと言った。高弟たちはいろいろに企んで見たが、なかなか七にはかなわない。

ある年の始め、七が師匠の所へ年始廻りに行ったところをやっつけようということになった。それは七が玄関から入って障子の間の所に頭を下げた時を見はからって、障子をさっと閉め、丁度障子で七の首をしめることにする計画であった。いよいよ七が年始廻りに師匠の玄

関に立った。高弟たちは今度こそと固唾をのんで障子のかげにかくれていた。そして七が師匠に年始の挨拶をしたところで、障子がさっと七にむかって走った。しかし七の首の手前で障子はピタリとまってしまった。七はこのことのあることを予想していたのか用心深く、障子のみぞに扇子をおいて挨拶したので、障子は扇子をはさんだままとまってしまったのであった。

こんなことがあったりして、七は次第に自分に危険の迫っていることを感じたので生まれ故郷の山之園部落そんを出て、岩川へ移っていったのであった（谷山白山・国料国盛氏談）。

谷川三四郎

谷川三四郎は久木山の人で黒葛原七右衛門の弟子である。

ある時、三四郎が福山の宮浦神社の前で昼飯を食べていると、福山の仁才衆が喧嘩をふっかけて来た。三四郎はとめるけれども、仁才衆はなかなかきかずにお挑んでくる。そこで三四郎は、お前たちがそげんすれば———という、ひらりと鳥居の上に飛び上った。これを見た仁才衆は恐れをなして逃げて行った。

それから福山の坂からスリがついて、荷物を持たせてくれといい、荷物を持たせてやって前を行きながら、簗から出て来る小鳥を目にもとまらぬ早業できつた——という話も、三四郎についた話とされているが、これは末吉の黒原勘兵衛の話と全く同じで、何かの都合で、この人に話が乗り移ったものと思われる。

牧瀬文四郎

谷川三四郎の弟子は牧瀬文四郎で、やはり久木山の人である。この後は文四郎から皆教わった。家系からいうと、文四郎の養子に幸之進（菅牟田、須田家から入る）その子藤助で、この人は棒術もやればやわらもやった。棒術は棒をもって行う武術の一つであるが、棒は六尺の杵の棒であった。

石塚四郎助

沖上の石塚四郎助は幕末ごろの人で、棒術、剣道、柔術共にした人である。浅山流の達人といわれる。この人も谷山から来たといわれるが、この家の跡は現在沖上にない。

浅山流というのは鮫島利雄氏の話では、浅山一伝流の

祖であるという。

石塚四郎助は見た人の話では、一丈くらい高い松の枝を飛び上って切って見せたが、しかしもう老体で飛び降りた時は、息をふうふうはずましていたという。

またこの人は畳の八枚蹴返しもやったという。畳の八枚蹴りは敵に襲われた時、畳を蹴り上げて防ぐ法で、昔の手利き者の話によく出て来る。

提灯の柄

某が福山の宿屋に休んでいて、夜寝ることになった。その時宿屋の主人が、この某が金を持っていること目をつけていることを某も感じていたので、提灯の柄に竹を添えて長くして帰っていた。ところが人里離れた淋しい道に來ると、銃声がして、提灯の柄竹のところを弾が飛んだ。かねてこのことあるを考えていて、提灯の柄を長くしていたので命拾いしたのであった。そこで某は弾にあたったふうをしてすぐ倒れたので、銃で打った男が寄りそって来たところを折りしいて、髪の毛を切って帰った。

翌朝、某は福山の宿屋に行って、主人に会いたいという、主人は頬冠りをして出て来た。そこで頬冠りを取

れと酷しく言つて、懐から昨夜切つたまげを取り出すと、主人は強盗を謝つたという。(谷川三四郎以下は鮫島利雄氏談)

兼かみ碓いぶり

坂元の仮屋門の分家、仮屋小仲太の長男兼太郎は、天保二年二月十三日生まれた。大きくなると、よく角力をとつた。兼太郎は力持ちで、四斗俵を投げさせて、それを額で受けとめたというほどであった。

青年時代になると、世間に知られるようになった。上納米を納めるため鹿児島に連れて行かれた時、藩邸にいた力自慢の者が、玄米二斗五升入りの俵を左右両手に一俵ずつその上口に一俵をくわえて運んで見せた。これを見た兼太郎は、自分も出来るといつて、見事力自慢の者のやつた通りしてのけた。これを見ていた人たちが、「君は角力はとらないのか」ときくので「少しはとる」と答えた。

そこで鹿児島在住の力士八重垣と藩主の面前で角力をとることになった。初番は兼太郎は負けた。しかしあと二番はつづけて勝つたので、藩主は褒美に兼太郎に「兼碓」の名を与えた。兼太郎は大いに面目をほどこし

て帰つた。

一説に、この角力に勝つた兼碓は鼻を高くして、二の丸の下を逆立ちをして廻つた。それを見た城の人たちが怒つて、「坂元の角力とりを殺せ」と追ひ廻し、散々の態で逃げ帰つたという。

兼碓はよく近郷に角力とりに出かけたが、大隅半島で彼の右に出るものはなかったといわれている。宮ヶ原の祭の時、角力をとる相手を土俵の真中で逆落しに投げたら、相手が大いに怒つて、刀を抜いて追いかけて来た。兼碓は恐ろしくなつて、着物をとると一生懸命に逃げた。途中で、背後が騒がしいのもうてつきりつかまつたと思つて振り返つて見ると、当の相手ではなく、その喧嘩を見ようと追いかけて来た人たちであつたので、ほつとしたと後年述懐していた。

兼碓が七十歳のころ、立馬の供養段で、山を抵当にはめ東京角力を呼び、自分でも角力をとつた。これが彼の角力のとり納めであつた。兼碓は相当山林などの財産もあつたのだが、角力のため財産も減つた。明治四十二年二月十九日、七十九歳で死んだ(仮屋重盛氏談)。

神牟礼の肝付家

神牟礼の肝付兼井方に、肝付家に伝わる茶釜、柄鏡二個それに系図がある。

元来この肝付家は、高山の肝付兼重の後裔で、系図によると、「兼重折右衛門が明治元年恒吉士族被仰付」けられて、この地へ来たものである。肝付家の墓は土地の人の墓地とは別になっている。

ここに伝わる茶釜は大きな茶釜で、戦争に持って行ったものらしい。茶釜には肝付の紋が両方に一つずつ、それに菊の花を三つ形どったのが、両方に浮彫うきぼりされている。蓋ふたには花押が浮彫されている。柄鏡は大小ある。

兼井二十歳のころ、高山の肝付家と当家とが本家論争があった由、その当時の新聞を賑わしたそうであるが、兼井も高山へ行って、彼地の肝付家(当時某銀行支店長)の家伝品を見たそうである。向こうでは錦の御旗を持っていたという。それに紋どころが、向こうは鶴二羽紋つるにふたはねこちらは鶴三羽紋で鶴二羽は二男家、三羽は三男家ということになったらしいが、果してそのようなものであるのかわからない。

桜谷の蜜柑

菅牟田に桜谷という谷がある。今は水田が開け、道路も出来て便利になったが、昔は老木がいっぱい生い茂って、おそろしいような深山であった。桜谷の谷下は両方から険しい山が迫って、人通りも出来なかった。ただわずかに人が通れるのは、谷頭から流れてくる水が、岩を削って、幅三尺位の深い谷川をつくっていたので、谷に行くには狭い谷川の岩につかまって行くより外なかつた。こうした地形だから木材の伐り出しなど出来ないの、そのあたりは大平の山(ウヒランヤマ)と言って、二抱えも三抱えもあるような巨木がたち、昼なお暗い深山であった。

桜谷の近くの村に善助という若者がいた。親孝行で、正直な男であった。ある日、善助が谷川の岩につかまりながら谷をのぼっていくと、ちょっとした窪地があり、きれいな清水が湧いていた。あたりを見廻した善助はびっくりした。清水の湧き出ている近くに蜜柑の木があって、色づいた蜜柑が枝もたわわになっていた。善助は喜んで、その蜜柑を二つ三つもぎとって家に帰った。そして家族といっしょに喰べると、香り高いおいしい蜜柑だった。

深山に蜜柑のあることが伝わり、村の若者たちは、われもわれもと桜谷におしかけた。そして教えられたところをさがしたが、誰も蜜柑の木を見出すことが出来なかった。しかし善助がひとりでいけば、いつものように蜜柑の木があつて蜜柑をたくさんとって帰った。村の人たちは、善助が親孝行者で正直者であるから、神様が善助にさずかるのだと噂しあつた。

善助はある日考えた。蜜柑ちぎりにたびたびいくのは面倒だから、一度にこっそりちぎって来ようと大きなかご（一説に銭ぜにかます吠いという）を背負つて、いつもの蜜柑のある所へ行った。ところがどうしたことだろう。あれほどいつもちぎっていた蜜柑の木は、影も形もない。そんなことはないと思つて、善助はそこらを一生懸命さがしたが、とうとう見つからなかつた。善助はがっかりして、そこに突つ立つたまま考えこんでしまった。静かな山奥で聞えるのは谷川の水音にまじつて、ホーホーと昼の梟の声だけであつた（永田勘右衛門氏談・須田農夫雄氏まじめ）。

神 掛

神掛部落は平家の落人と言ひ伝えられているという。

平家が落ちて来たのが、師走の二十九日歳の晩であつた。中郷梅北の嫁坂から来たと言へられている。永野家について言えば、梅北の方が次男でこちらが長男であつたという。後年、梅北の永野進という人が系図はないかと訪ねて来たが、その系図は火事で焼けてなかつた。昔は方祭にも神掛と梅北は往来していたという。

一説には伊集院幸侃の残党が、ここへ落ちて来たとも言へられている。この説は元町長の川崎和夫氏から伝えられたものらしく、永田勘右衛門氏は、それは聞いていないといつていた。

果たしてどこから移つて来たのか、はっきりわからないうが、こうした言い伝えのあるところを見ると、どこからか移つて来たことには間違ひはないであろう。そして、師走二十九日にここへ着いたが、翌日は元旦である。正月の儀式が、ここにあつたお寺のものと、平家のものとは違うので、議論が起こり、平家の中の短気者の武士がやにわに住職を斬つてしまひ、寺も焼いてしまった。ここにあつた寺は寺号は判明しないが禅宗寺であつた。ところがその後、この部落にはいざこざが絶えないので、これは住職を殺したたたりであろうと、弔ひ法会を行うようになった。この法会は部落にある「お座仏」によつ

て行い、戦後まで行ったが、現在は途絶えている。

住職の墓は福吉栄之助方の屋敷附近の田圃の中に残っているが、三角頭の自然石で、別に文字はない。永田勘右衛門氏によると、この墓には住職の死骸は埋めてなく、ほんとうの死骸はあれから西方五、六十間の所にあるというが、それもわからない。この附近には伝説によると、鎧、兜が埋まっているという。椋や柞の大木もあって、その下に何か埋まっているかと思つて、掘つて見たが、何にも出て来なかつたという。柞はお寺の境内のものでこの附近には茶碗のかけらもよく出て来る。現に仏前の燭台の一部も福吉方で発見されている。

住職の墓には、昔は毎月、朔日と十五日には、煮メとお茶を必ず供えたものであるが、今は正月とお盆だけにやっている。

永田勘右エ門氏の日記の後に次の記録があつた。

「神掛の祖先は平家なりときく。旧時代神掛の屋敷に僧居たり。吾が先祖は平家の武士なりければ、壇の浦の戦に敗れ、落ち下る時神掛に來り一月元日の朝、僧を門外に切り、小僧も統て切り、二人とも同じ棺に納めて埋めたることをきく。これをきいたのは明治四十年で、凡六百年前に当らんかと察せらる。」

神掛部落にある墓石の中で、五輪塔（実際は下方三段増）があるが、これは永田家の墓で、年代は「寛延二年四月」「宝暦十一年八月」と読めるものが古い。その外にこれより風化度からいって古いと思われるものがあるが、これは年号が判明しない。

神掛部落に來た人たちは、「さむらい」であつたと土地の人は言つて居り鎧、兜、刀、劍のあつたことを伝え、永野時範方の附近には、「射場の谷」という地名が現在もある。ここは弓射の稽古をしたところであるという。

神掛部落の人たちは何時代にここへ移つて來たか判明しないが、前記永野家の墓によると「寛延」「宝暦」は明瞭であるが、風化して文字の不明な分、それに永野氏の話によるともっと古いものもあつたというので、この分から推定すると、慶長前後になるのではないかと思われる。伊集院幸侃の落人という説は、川崎和夫氏の説と思われるが、その是非は別として、時代から言えば、慶長五年ごろになる。平家の落人とすれば、これはまた時代は大変古くなることになる。

しかし中郷梅北から來たという話は動かぬところらしく思われるが、梶ヶ野の人たちも中郷から移つて來てい

ることはその系図にはっきり記されており、中郷と当地方との関係は昔は密接なものがあつたのかもしれない。

神掛には昔火事があり、そのため、春の彼岸の入りには必ずそばを食べるならわしになっている。浅井部落の方にも昔大火事があつてそばを食べることになっているが月日はわからない。

神掛部落では、正月は門松の代わりに椎の木をたてるという。平家の落人が椎の木をたてるという話と符合するようである。

神掛部落からは昔は世貫神社のカギ引きのカギを切つて出していた。

かんじん松

末吉、岩川境にあるかんじん松はかんじんが死んでいたのを、こっちに（岩川川床）おくと面倒なことになるので向こう側に持って行って置いたと言ひ伝えている。前は松の大木が立っていて、この木に登ると志布志の海が見えたと言う。

久木山の伊勢松

久木山部落の入口左手にあつた。目通り一丈くらの

大木で土地は鮫島金左エ門所有である。終戦後松喰虫で枯れた。部落の平牟礼銀次郎の祖先が、伊勢皇大神宮に参拝して、帰ってから植えたものと伝えられている。其後当初の松は大風に吹き折られ、現在のは同所に植え継がれたものと言われ、最初の松は現在のよりも大きかつたという。これから考えると、余程年代を経たものらしい。この附近から古代石器が出土したという。

また福ヶ野藤助という人は、平牟礼氏の祖先と思われが刀をさして、二回か三回伊勢詣りをしたと伝えられている（鮫島利雄氏談）。

山伏系図と呪文秘法

久木山の久保勘右エ門方に系図と山伏の秘法を書いた書きものがあつた。唐国からの秘法の系図で源氏の名などもあり、最後に「文明十四年三月十二日相伝師平康続在判」とある。秘法は敵に備えた戦争に関した呪文秘法である（鮫島利雄氏談）。

浅井の摩利支天像

浅井の三文字の所を宮ん元と呼ぶ。ここは某家の所有であつたが、阿弥陀堂があり、六〇cmくらの如来像と

三〇cmくらいの摩利支天像があった。ここの阿弥陀様は子宝の神様として名を知られ、よそからもよくお詣りがあったという。

その後、浅井の上の広場に阿弥陀堂を作り二体とも移し祀ったが、既に浅井から転出していた某家では不幸が続くと言って昭和三十年ごろ二体の像を集落に断りもなく持って行ったので堂は空になった。仕方がないので永田武二氏は高野山にお詣りした時、今の像を買ってきたという。ゲートボール場兼広場の東端の小祠に祀られている。永田武二氏は如来様と言うが部落では観音様と言う。今祀られているのは観音様のようである。

浅井部落ではこの祠を尊崇しており、毎年の彼岸中日の晩に観音様の前で宴を開く。当日は女の人たちが各戸から米合こ一つ（二合五勺）ずつもらい集め、それを炊いて三角のおむすびをつくる。それに煮メもつくって、そこにあった集会所（今はない）で、おむすびと煮メをまず観音様にあげ、残りを皆で喰べる。観音様にあげたのは、花房家の嫁が持って帰る。

この行事は戦争中、米がなくなってやめた。終戦後浅井部落は二つにわかれたが、その時祠も向こうの集会所に移した。現在の場所にあるのは、その時新しくつくっ

たのであった。前にあったのは、今のものより大きかったらしい。浅井部落は一人分離したが今はまた統合していっしょになっている。

なお、この行事とは別に、浅井では七月十五日は「よく日」であるが、その日各戸で赤飯を炊き、それを観音様にあげる。これは部落いっしょではなく、各戸めいめにあげるのである。

この祠については鮫島利雄氏によると、次のような話が残っている。

「今町（都城市）の児玉家の三人兄弟が毛原合戦で負けて、逃げて帰る途中、浅井で氏神の摩利支天を置いて、今町へ帰った。その時、三人兄弟の末の弟が右肩を斬られ、重傷を負っており、兄たちが介抱して帰った。

その時、この摩利支天像を花房家（祠のすぐ近く）の祖先にたのんでいったという。そして今町の児玉家は今も子孫が今町におり毎年今町から参詣に来ていたそうだが、その後（昭和十年前後）今町の児玉方に立派な氏神様を造ったので、それ以後は参詣をしなくなった。児玉家には系図があり、それには摩利支天と書いてあるという」

前記の彼岸中日の所で、観音様にあげたおむすびと煮

メを花房家の嫁が持つて帰るといふ所があるが、それは鮫島氏の話に出て来るように摩利支天像を花房家にたのんでいた関係からであることがわかる。

今町の児玉家を調査したが鮫島氏の話と合致する所もあり、そうでない所もある。毛原合戦というのは鮫島氏の話によると、百引のあたりであろうということであったが、児玉家の系図によると、関東武蔵のあたりらしく、毛原合戦では負けたのではなく、功名をたてている。たびたび功名をたてて九州へ下向している。末の弟が肩を斬られたことは鮫島氏の話と一致している。児玉家に立派な氏神様が出来たというのは、今町では見つからなかった。ただ児玉家の祖先の三人兄弟の墓のある所が少し離れているので、児玉家の氏神様の所に石造の立石を「よせ墓」としてたてていることが、どこか似通ったものが少しあるようである。児玉時吉という人が児玉家の子孫であるが、浅井の摩利支天が祀ってあることがわかっているかと聞いて見ると、全然知らない。勿論お詣りに行った話も聞いていないという。

三方荒神

三方荒神は長江のあたりでは「サンブクジン」とい

う。城山の上の方にあり、祠が三つある。この辺りは山が深く繁り、そこへ行けば容易に出られないほどであった。三方荒神は初めは初代地頭寺山四郎左衛門の氏神であったという。記録によると、旧藩時代は投谷神社、長田神社、天満宮、御園大王、三方荒神を五社と唱えていた。そして三方荒神は明治初年御園大王、天満宮と共に郷村神社へ合祀になったとある。

この三方荒神に伝説がある。そこにキンチクが生えており、そこを掘ると金の壺が埋まっているという。そこで義彦という男がそのキンチクを見出し、その根もとを掘ったところ、カメツボのワレが出たという。



日輪城跡の三方荒神

長江の池

長江の池之迫に大きな池があり、大蛇がおったという。今は池の跡は水が極く浅くなっている。

長江字岩穴口に観音が立っている。この観音はいつごろ立ったかわからないが、古老の言い伝えによると、ここにぬき穴があり、清水まで通ずるといふ。この観音はいつのころかその上の岡が崩れて埋まったという。しかしそのぬきから通ってくる水の池は、木の葉一つ浮かんでいない。

道路改修のため、今は池はない。

千人山

中須田木から上須田木と八重山への分岐路があるが、八重山へ行く路の急なカーブの西が丘になっている。これを千人山という。

恒吉日輪城が陥落したのは、ちょうど仲秋名月の十五夜で城兵が綱引きに出ており、その虚をつかれたためであったという。その時の軍用金をこの千人山に埋めたといわれ、この伝説によって何回も掘った者があったが何も出てこなかった。

この千人山は五輪塔も多数あった。市成城の山田聖栄

の文明二年の記録に「山東すた木合戦ニハ……」北郷右京亮、樺山次郎討死とあるが、千人山は城跡と思われる。

庄屋おとし

月野の中村部落に「庄屋おとし」という所がある。一方は月野川の岩石の中を急流の走る川の険しい崖に沿い、一方は僅かに小路の畔が通ってその上方は岩がおいかぶさるようになっている。一歩足を踏みはずすと月野川へ落ちる、まことに危険な所である。ここへ昔、庄屋をつき落としたという話が残っているが、詳しいことはわからない。おそらく苛酷な庄屋を恨んで、ここからつき落とししたものであろう。その後、串良の人が都城へウナギ売りに行つての帰り、ある人が大金をもつたウナギ売りをだまして、この「庄屋おとし」へ連れて来てつき落とししたという。その時ウナギ売りの死体を川さがししたが、結局、死体はあがらなかった。この話は割に新しい話であろう（岩永弥兵衛氏談）。

大鳥小鳥

今は大鳥小鳥と書いているが、昔は大取小取であつ

た。取る取られるという言葉やをさけて、やさしい大鳥小鳥にしたものと思われる。俗に「大鳥でとらねば、小鳥でとる」と言われていた。これは河童（がらっぱ）もいり、スリのことも言っているのである。実際にこの川は岩間を流れていて危険で、毎年子供たちの水死が多かったという。こうしたことから河童がいるということになるであろう。

道は細く山は生い繁っていたので、淋しい山道であり、スリもいたのであろう。

この道は野方へ通じ、先は大崎へ通じた。現在の鹿屋県道とはもちろんちがった道である。

西南役の時、菱田方面から官軍が押し寄せて来たのは、この道である。小鳥の川に石の橋がかかっていたのを、岩永氏の祖父が大力でとりのけて、官軍が川を渡れないようにしたつもりであったが、川幅が狭かったので、官軍はどんどん川をとび越えて渡り、何にもならなかったという笑い話も残っている。その場所は、岩元の現在の小鳥橋のすぐ下流の所である。

（岩永弥兵衛氏談）

大鳥の碑

大鳥に月野から野方へ渡る所に、境界石とも言われている文字を刻んだ碑がある。

この碑の文字が磨滅して消えるころには、河童が出て人がとられるという話がある。

またこの附近には昔、酒が湧いて出ていた。その酒を牛がよく飲みに来ていたが、牛に飲まれては惜しいので、ある人がその牛を殺した。すると、今まで湧いていた酒が出なくなったという（中川宗二氏談）。

伊屋松の伝説

伊屋松から桑迫に通ずる道路に「肥後どん松」又は「肥後塚松」と称する所があり、肥後の大將が討死した所であると言ひ伝う。大きな松があったが今はない。

伊屋松殿という殿様が、昔ここに居城したので字名とした。萩元方の後、藤元方の後から千人塚の側から石神方の近傍に至るまで一つの堀を廻らし殿様が没落した後、六門に分家した。第一の本家は萩元権八即ち八太郎の宅で、この中三家にはそれぞれ昔から宝物を伝えている。萩元八太郎方は駒の乗鞍、弓と矢立、萩元正太郎方には槍の穂、藤本正次郎方には長刀があったという。萩

元正太郎方は二男家であったという。

若松親の墓には、石の中に立派な人形を収めてあったという。俗に「長者どんの墓」といった。今の萩元家の屋敷はその長者殿の跡という。

竹田仲次郎方の元祖勘之丞と言う人は「法」の利く人で、殿様の面前で祈禱で鉄の鳥を作り、法でこれを落とすことになり、他の人は落とすことは出来なかつたのを、竹田だけはワカシ金にしてグワラグワラ落としたという。そこで殿様はぜひ鹿兒島に移住せよという命であったが、子供だけやって、自分は高松に一生を終つた。鹿兒島から墓参に来ていたという。

萩元方の槍の穂は長さ約六寸、三角形である。

石神殿は投谷八幡の母様、野方の曲りの上の花立松は父様である。

萩元家の馬屋の後から藤元方の後まで馬乗場であった。

藤元家の入口に地藏堂があり、榎の太木があつたが今はない。藤元家を堂ん後と呼んでいる。地藏が二体あつたが、一体は市成太吉方へ、他の一体は不明となつてゐる。

部落公民館の道路の向かい、萩元氏の入口に伊屋松門

藤左衛門寄進。元禄七年の柱石があり、その上に文政十丁亥七月十六日の高さ三十cmの地藏が祀つてある。台座に朝錫命而夕有終水欲静而不寧伊藤氏女と刻まれている。

萩元浅右エ門方に伝わる弓の矢立は約一尺二寸くらい黒塗である。馬の乗鞍は総て皮製で、桐の葉の散らし金でこしらえ、あぶみは木製で焼失、ただ、たすけ房二個及びあほいの手四筋だけ残っている。皆絹糸で作製されている。

伊地知殿の上の松山の古墓の一には、松悦宗青信士、延宝六年七月四日、中に弥陀如来を刻んである。また他の一墓石には若松左京兵衛忠親、表面に求説道信士、享保十三年十一月廿三日とある。表面の上に紋を刻む。また一基には正三周信の女、享保十一年十月八日とある（中内伝左エ門日記）。

上勢井の阿弥陀如来

上勢井の阿弥陀如来記によると、志布志密厳山丈陸寺大性院（真言宗大乘寺末寺寺領六十七石余）開山良範法師往時は日向の談議所という中国筑紫の本寺であるといふ。

ここにある阿弥陀如来は、行基菩薩の作を本尊としているが、その以前は丈六の如来を安置したと言われている。

その本尊にまつわる話が残っている。いつごろのことかまたどうしたわけかもわからないが本尊を鹿兒島から志布志へ遷座されることになり、福山街道から月野の上まで運んで来た。ところが、突然本尊が非常に重くなられ、数百人の人夫がどんな力を出し合ってもびくともされないで、仕方なくその附近の上勢井の山の中に安置した。その御尊体は今腰から下はなく、腰から上の方が残っている。面体その外折損しているが、大きな仏さまである。

この大性院は帖村麓内にあり、志布志の御祈願所であった。当時の客殿は、新納近江守忠勝の広間であるといわれている。八畳敷六間、左右に広縁があった。十二世日盛法印は朝鮮の役の時、島津慈眼公に従って行ったという寺の伝えがある。

鎮守天神社あり木像の天神を安置す。これは新納家二代越後守実久の長男新納悪口郎久頭の霊を祭るといふ。久頭大力無双にして、大慈寺内鐘楼に雲板あり、二、三十里搜

ね廻したるなり。これは久頭自らねられしという。径八尺余の太鼓胴あり、久頭の陣太鼓という、かつてこれを首にかけて踊りしとも伝えらる。これ楠木のくり胴にて双方の縁にメ針の跡あり、法鼓とも伝う、余談に至るもこの天神像神体に書す(中川宗二氏)。

八合谷の横穴

「月野の八合谷の谿間の藪林の中に一つの横穴がある。何時の時代にどんな人がどんな目的で掘ったか全く不明である。俗にこの穴は岩川の別府(ここから一里余あり)に通ずるといわれているが、真偽はわからない。入口は小さく、漸く匍匐して入ることが出来るが、奥の方は探究したものがない。」

以上は「月野郷土史」に記してある大要であるが、昭和三十五年七月、この横穴を調査した。入口は縦に細長い穴で、かがみながらやっと這入ること五mくらいで、内部はやや広くなっている。その広さはおよそ畳四枚敷くらい、高さは、大人が自由に立って、まだ上の方一mくらい間がある。その中央に上の方へ通じた穴があるが、これは地下水が流出した跡であろう。これから奥の方へは、やっと匍匐して行けるような穴が奥へ通じている。這入って見るがその先はもう行けないので、この状

態で行きづまりになっていようである。

土質はシラスにやや黒ずんだ軽石が混じっている。大きい軽石で径四、五センチくらい、大小種々である。この辺りのシラス形成の特徴である。水に流されて沈澱したあのシラス状である。結局、シラス土に水が流れこんで浸蝕したものであろう。

第三節 民俗

暮から正月

正月が近づくとその準備をする。

シラスをとって庭先にシラスの道をつくり、門口の所にも両側にシラスを盛る。墓にもシラスをふると、正月の近づく感じがするものである。このシラスを二十七日、二十八日までにはとることにし、二十九日にはシラスはとらない、二十九日にとるとシラスがくずれると言われていた。(昔は二十九日が大晦日で今の三十一日にあたる)。

門松は松の正木のいいのを選んで立てた。昔はこの地方では松だけ立てたもので、竹を添えるのはその後での

ことである。神掛などのように松の代わりに椎の木など立てる所もある。

門にしめなわを張るのはどこも同じであるが、ここでも芋や橙をくくりつける。芋はここでもやはり家族繁昌の意味を持つのであろう。

餅は米の餅、粟の餅、からいもの餅を搗く。鏡餅は一家が円くおさまるようになってつくられる。これは嫁が実家を持って行く外、主家を持っていく習慣もある。床の間の餅は三段にして、その上に橙をのせた。今は橙がないので蜜柑で間に合わせたりするが、昔は橙が多かった。本橙の皮は干しておいて、それを煎じて飲むと、風邪の薬になった。

祝餅(ゆえんもち)は床の間、先祖棚、長持、馬屋の臼の中、米蔵、机の上などに、うらじろなどしいてその上に餅をのせておく。鉦、鎌、鍬その他金物の農具は、それぞれきれいに洗って一カ所に集めて祝った。こうして祝わないと金物類はもちが悪いと言われていた。

餅をつく時、鏡餅に似て、形も少しそんざいな大きな餅をつくって置き、数日後包丁でほどよく切れるころになつて、これを薄い餅片にきる。これを恒吉では「かなもち」、笠木では「こわもち」、梶ヶ野、柳井谷などでは

「くいのもち」という。婦人がお産をした時、これを焼いて食べさせるのが主な目的であるようだ。昔はお産した時の食物は極端に制限があったので、こうしたものも考え出されたのであろう。

大晦日の晩は歳とりの晩である。歳トの晩という。

各家では鶏をとって御馳走をつくって、年を新しく重なれたことを祝う。ふだんは粟のたくさん入った御飯が多かったがその夜は米の飯にする所もあった。中園方面では、歳トの晩に小餅を三つ盆の上に載せ、御馳走の膳の上にのせる。三つの餅は米の餅二つ、粟の餅一つであるが、これらの餅はその夜は食べない。これを元旦の朝焼いて食べ「はがため餅」と言った。御馳走を食べてから、蕎麦を食べた。歳トの晩は御飯はあまり食べなかつた。蕎麦を食べれば一年間の悪いことがついて来ないように洗い捨てるのだと言われていた。

この蕎麦を食べる風習は、今はあちこち行われているがそれは大い最近よそから入って来たもので、恒吉、笠木、柳井谷方面にはこの蕎麦を食べる風習はなかつたようだ。その中で中園方面にこの風習のあったのはおもしろい。中園方面は鹿兒島、その他から移住して来た人たちが多いため、あるいはそうした関係があるのかも知

れない。

歳トの晩には火のトツトツといって、長い輪切りの大きな薪をいろりにくべたが、長いものは片方の端に薪などを枕にして安定させた。

梶ヶ野では歳トの晩は松など焚かないで特に櫟くぬぎを焚いたという。これは苦をぬく、すなわち苦しみを焼き捨てるという意味で、また貧乏神を焼き出すのだといって、夜更けまで火を焚いた。

歳トの晩には「火よこし」をすてる。「火よこし」は竹の二節のを使い、手前の節はのぞき、先の節に小さい穴をあけて、手前を口にあて、火に風を送って火をおこすもの。火おこしがなまって火よこしになったのである。昔は囲爐裏にはつきものであった。

歳トの晩はこの「火よこし」に栓をして、家の外、屋敷の外道などに捨てた。これは貧乏神を捨てると言うのであった。

年の暮に「シヨチツ」といって、薪を墓にあげる。梶ヶ野、恒吉などで行われている。梶ヶ野では先祖を尊ぶため、いい薪を、墓に一ずつあげた。この薪を七日の「おねっこ」に使ったが、「おねっこ」がなくなつてから子供たちが集めて売り、学用品など買った時代もあつ

た。

恒吉では薪を小さくきって、今も墓にあげている。

岩川あたりでは魚がいつもないので、暮には正月用の魚を志布志までわざわざ買いに行った。

松の小葉に「からいものくず(澱粉)」をつけて、先祖さまや墓にもあげた。柳井谷方面では、御飯をたく時のぬき(どろどろした汁)をとっておいて、それに松の小葉をつけ、更に「からいものくず」をつけた。これは入念な仕方であるが、とにかく松の小葉に「からいものくず」をつける風習は町内どこでも行っていた。この風習は松に雪が降った姿を見せたもので、雪は豊年を意味する、そうした豊作を願う所から行われたものと古老は語る。

元旦は朝早く井戸の水を汲む。これを若水わかづはつ初穂水はつほみづなど言い、まず先祖さまにあげて、その残り水で餅、芋、もやしなど雑煮をつくる。

若水をたんに汲んで、その中に小餅をおとし、その餅を上から竹の先にさし、それをもちあげる、その時、上の方が表になると兩年あまたし、餅の裏が出ると日年ひとしということになるつまりたんごの中に餅を入れた時、表が出ていれば、竹につきさしてもちあげた時の表面は裏になるわ

けである。こうしてその年の兩年、日年を占ったものであった。

雑煮の里芋は前もって蒸して置いて、正月にはいつでもすぐ使えるようにしておいた。これは里芋の味をおいしくもしていた。梶ヶ野ではおもしろい言い伝えがある。里芋を食べる時は、頭の方からでも、尻の方からでもいいから、とにかく片方から食べる。これを両方から食べると、ねっと(腫物)がたくさん出来るといふ。

元旦の朝は飯はたかないと言う。正月三日は御飯は食べないとも言ふ。朝は御飯は食べないで、昼は御飯食べるといふ所もある。

「はがため餅」は少し大きい餅を四つつくって、それを老人の家へ持って行った。この老人というのは、親類の老人の場合もあれば、親類でない場合もある。持って行く日もきまった日はなく、思い思いの日であった。

正月二日は妻の実家に年頭に行く日、持って行くものは鏡餅に米一升を「こんつん」に入れた。「こんつん」というのは米一升入れる布製の袋であるが、色々異なつた布で袋をつくり、底は坐りのいいようによせてあり、口の方は「ちち」をつけて、よまでしぼり寄せて結び閉じるようになっていた。作り方がむずかしく、念の入っ

たものであった。

正月の子供の遊びは、男の子は「はまなげ」、女の子は「羽子つき」であろう。

「はまなげ」は木の枝をゴルフのクラブのような形に切り、丁度ゴルフのように「はま」を打つ。「はま」は手ごろな木を輪切りにした円いものである。

「はまなげ」は道で行うが、両組に分かれ、一つの組は数人が順々に並んで「はま」の来るのを待っている。向こうから「はま」が飛んで来ると、それをこちらで受けとめる。第一番に立った者が受けてうまく打ち返すとそれでいいのであるが、若し第一番が打ち損じて、二番目がうまく打ち返すと、第二番は「ないやがって」第一番になり、第一番にいた者は第二番に格下げになる。このようなしくみで面白く遊んだものであった。しかしこの「はまなげ」ははげしい「はま」が飛んで来ると非常に危険で、そんなことをやかましく言われているうちに、いつかすたっていった。

六 日 歳

「ムカドシ」という。モロムギ（モロノキという）の葉とタラの皮を削ったのを、門口やかまどにあげ、また

墓にもあげる。モロノキは槇に似た木で、タラは葉は八ツ手に似て居り、木に鋭いトゲのあるもの。モロノキは葉が鋭いし、タラのトゲは鋭いもので、鬼が来ないようにこれをあげるのだと言われる。

ななとこずし

七日は「ななとこずし」をつくるならわし。これは大方今も続いている。「ずし」は餅、芋、菜ッ葉、芹、人参、牛蒡、昆布などなんでも七品入れて作る。それを一家で食べるが、七つになった子は隣近所のずしをもらいに歩く。

おねっこ（おねっこたっ）

岩川、笠木、梶ヶ野、柳井谷などでは「おねっこ」恒吉では「おねっこたっ」という。七日の夕方、生竹を中心にして、周囲に薪をつんだりして火を焚く行事である。

「おんびたっ」とも呼んでいるが、鬼火焚きのことでは悪魔を追い払い家を守ってくれる鬼を迎える行事といわれる。しかし後世鬼を追い払う意に変化しているところが多い。

梶ヶ野では、孟宗竹二十本くらいと、年の暮に墓にあげた割木の薪を集めてきて、「おねっこ」に使う。普通は門口のしめなわの飾の下に薪を置くので、それをもらって来る。笠木では唐竹を十本くらい中に立て、柳井谷では、ご、竹を束にして、薪の間に入れる。燃える時パチパチとなる。笠木では三又路で「おねっこ」をしていたが、後には危いというので、田圃の中で行うようになった。



おねっこ

た。「おねっこ」は町内各部落で大抵行っていた。「おねっこ」の焼けた竹の葉をむしって帰り、牛馬に食べさせる、「ねら」がなくなると言われていた（「ねら」というのは人間にすれば風邪のようなものであったらしい）。

「おねっこ」はこうして行いが、末吉ではこれに「鬼追い」がついた所があった。しかし大隅町内では「おねっこ」焚きだけで、「鬼追い」はなかったと古老は話している。

お七夜（おひっちゃ）

親鸞聖人の臨終前七日間を信徒は精進料理で過ごすのであるが、これをお七夜という。命日は旧曆十一月二十八日であるが、新曆の一月十六日昼臨終としており、一月九日から始まるので、正月の年頭の往来の方を九日前には済まさないと言ったものである。精進料理になると困ると言ったものである。「おひっちゃ」に入ると、魚・肉類を使わないのであるが、信心の深い家では、お茶碗などもきれいに洗って、文字どおり精進料理のつましい生活に入った。

普通は自家で精進、お寺に参詣するが、梶ヶ野では部落の仏様のあるお番役の家に参詣、お茶を持って行く。

お番役の家では九日の夜から十六日の昼まで朝昼晩にお勤めがあったが、現在（昭63）は十日と十三日の中日と十六日の昼までの三日間のお勤めをする。

一週間の精進が済むと「精進おとし」といって、魚を食べたり、鶏をとったりする。

正月祝った「祝餅」は十一日に下げる。床の間や机の上農具などにそなえた祝餅は、下げて、煮たり焼いたりして食べるが、梶ヶ野では八日に祝餅を下げている。柳井谷、中園、恒吉など別に定まった日はない所もある。

十三日

十三日は「かわいまし」といって、下男下女の年季が明けて交替する日である。昔は旧十二月十三日であったものが、後一月の十三日になったものである。下男下女は一年ぎめで、農家や商家に奉公した。この交替期の十三日が近づく、一週間ばかり前に、下男下女は実家に帰って来るならわしであった。「せんたきもどつきやい」と言われて一年間たまった汚れものの洗濯をするため実家に帰るものであったが、その時が下男下女に対する慰労休暇であり、また翌年の身のふりかたの相談でもあつた。

た。

下男下女は農家の場合、朝食前の草刈りから晩飯後の夜業と遅くまで働き、盆正月だけが休みという状況で、夜業は一晚に縄三十尋束を五つ、むしろなら一枚、かますなら二俵と決められるなど重労働だったが、「正月の十三日が今夜ならよかる」という歌があった程、替いましが待遠しいものであった。

下男下女の斡旋人を肝煎いどんと言ひ、この人たちがあちこち廻って話をつけ、一年の奉公の契約が成り立った。下男下女の給料の多いのは「かしたでかん、かしためろ」と言った。給料は年額で、下男下女は必要な時にくらかず借りました。十三日の辞める時も、新しく奉公をする時も、その家へ親と一緒に連れて来たり、連れて帰ったりした。

もっどし（小正月）

元日の正月を「うどし（大正月）」、十五日正月をもっどし（こしよがっ）と言う。もっどしは望（満月）の意と思われる。六日歳に祝ったモロムギやタラノキを取り去って、新しくモロムギやケズリカケ、めの餅、猫柳の枝など飾る。

梶ヶ野では、六日歳の時は実のならないモロムギをあげ、十四日には実のなっているモロムギをあげた。

もっどしには餅を搗いて嫁は実家に鏡餅を持って行くが正月のより少し小さ目にする所もある。嫁の実家からはお返しはしない。

十四日の朝は粥を炊いて食べる所もあった。その中、井一つ或いは茶碗で一つ粥をとっておいて、十八日にこれを食べ、食べた箸を手のひらに塗り、また足などに塗ると蜂に刺されなかつたり、蝮に襲われぬと言った。

梶ヶ野では十四日の夜、猫柳で箸をつくり、それで御飯を食べる。その夜は茶碗を洗わぬことになっており、茶碗を洗うと田圃の「みなくち」を洗い流して、田圃が干上ると言われていた。又十四日の夕方は早く仕事を終えてあがらないと一年中しめが悪いといわれている。

もっどしには「もくらもっ」「かせだうっ」「めのもっ」など多くの行事があった。

もくらもっ (もぐらうっ)

十四日には「もくらもっ」が笠木、柳井谷方面にあった。恒吉、梶ヶ野、中園あたりにはなかった。笠木では

棕櫚の葉で地面を叩いたものである。

「もくらもっ」は本来、竹竿の先に藁苞を結びつけて、子供たちが地面を叩きながら各戸を廻り、もぐらが農作物を荒さないように豊作を祈願する行事である。各戸では子供たちが来ると小餅をくれた。これを子供たちは「こんつん」に入れ持ち帰って、焼いて食べたものである。

粟ん穂

竹を割って、その中間を削り、葉の形にして、根元の方は焼いて曲げ、掛けられるようにする。また先の方には餅を四角に切ったものをつけるが、この餅は粟餅二つと米餅二つで、これを床の間の両端に掛け、また台所や大黒様の前にも掛けた。穀物の穂の垂れた形を作ったもので、萱の葉で稲穂の形を作るところも県内にはある。

これを作るのも十四日で、豊作を祈る行事である。この粟ん穂に使った竹は、とっておいて雷が鳴るとき囲炉裏にくべると、雷がやむと言ったものである。

めの餅 (めのはな)

新しく搗いた餅を三〇角位に切り、榎(柳を使う所も

ある)の小枝に一杯さして、床の間や先祖棚、内神様、墓など、所によって上げる場所の違いはあるが、十四日に飾って祝う。きれいな白い花が一杯咲いているようである。

メはまゆのことで、蚕が順調に育ち、まゆがたくさんとれますようにと願ったものである。

かせだうっ

十四日の夜、集落の青年たちが仮装して新築した家庭や、嫁を貰った家庭、子供の生まれた所などを主に訪問した。無言で座敷に上がり込むと、主人側は火のおきを茶受けがわりに差し出したり、松かさの吸物を御馳走に出したりして訪問者を困らせる。焼酎で祝って餅や祝儀など持たせて帰すが、かせだうっの意味は不明であるものの、家庭を祝福して上げる行事である。梶ヶ野には子供たちの間で現在(昭63)も残っている。

山ン神祭り

十六日は山ン神祭りである。山ン神祭りは山地の農民の講で、正、五、九月の十六日は山の仕事をしないで休む日であり、山に行くと怪我をするという。この中でも

正月十六日が大事だといわれ、正月十六日だけを休むこともある。

炭焼き、こびき、大工など職場集団によっては、親方などの家に集まり、山の神に酒を上げて宴に入る。

二十日正月

一月二十日は正月の終りだといい、年頭に行けなかった所へ行く。「二十日正月までは餅は絶やかさならん。誰が来いかも知れん」と言ったものだ。正月の終りの直会にあたり、昔は一月二十日であった。

送り正月

三十一日は送り正月という。この時はもう餅は搗かないが、やはり今まで年頭に行けなかった所へ行く。この日までは正月だというのである。

三月の節句

三月の節は盛んであった。「雛じょ」を飾り、親類知人集まって賑やかな宴を開いた。しかしこれは経費が沢山要るので、金持ちでなければ出来なかった。親類知人は前もって、祝の雛じょをその家に持って行った。雛人

形は今の雛さまより大きい焼きものものであった。「山くやし」と言って、この雛壇を崩す時また賑やかに宴を開いた。

三月の節は今は四月三日に、だんごかなんかつくる程度になっている。

四月とつ

四月三日がくると「しんがさんちがきたでトツどん上げんなら」といって、藁苞に赤飯や団子など御馳走を入れて両端を細縄で下げるようにし、縄の間に竹を数本横に差したりして、庭木などに掛けるのだが、これを「こっぽしどんにあげる」と言った。この藁苞の中の御馳走を烏が沢山食べた時は「かれむし」（赤痢のことらしい）は流行しないし、食べない時は流行すると言われている。「烏どんの正月」とも言ったが、庭木に御馳走を下げておくと、ついでに庭で遊んでいるひよこを盗られたりしたものであった。

「トツ」はトキで齋の字を当てたりするが、伝染病が流行しないようにと願う「病ドツ」である。病ドツの他「トツ」には、火災防止のための「火ドツ」、農耕生活の上での「タウエドツ」「アワウエドツ」などがあつた。

トツ

恒吉の麓部落の上囲、下囲、平原、馬場は正月二十日と七月二十八日にトツがあつた。正月二十日に行うのを初ドツといつた。この日は部落から投谷八幡に詣つて、神札を貰つてきて、これを部落の入口、四辻などに立てる。凶事や病氣などが部落に入つてこないようにという願ひである。流行病の出た時などは、臨時にトツを行つていた。初ドツの時は麓では豆腐と焼酎であつた。

麓の上囲は初ドツが今もある。麓部落会長の下に、上囲には見締りが三人いるが、この中の一人の家で行う。以前は二百円宛出していたが、現在（昭63）は三百円宛出し合つてすしなどをつくつて食べる。

梶ヶ野では、二歳入りの時、初ドツをしたものであつた。

五月節句

五月節句は五月五日。男の子の成長を祝うこと今も変りない。五月節句には粽（べぶまき）をつくる。べぶまきは餅米を灰汁水に浸したものを、竹の皮に包み、それを三ヶ所か四ヶ所からそ（麻の緒）でくくつて、灰汁を入れたかま鍋（大きい鍋）で煮る。なかなか簡単に煮え

ないので、長い時間をかけて根気よく煮る。煮方が足りないといと、まきの中ほどが半煮えで白く残るものである。べぶまきの出来、不出来は灰汁のよしあしに関係すると言われる。灰汁をとる灰は堅木のいい薪を焚いた囲炉裏の灰がよく、木の根や雑物を焚いた灰はわるいと言われ、いい灰のない家では、わざわざ他家に灰をもらいに行くものである。

五月節句にはべぶまきの外に、つきもののように「くわくわらんまつ」をつくる。これは餅米の粉に砂糖を加えて水でこねあわせてだんごにし、くわくわらの葉に包む。大きい葉は一枚の中に二つ折にして入れ、小さい葉は両方から合せるようにする。そしてこれを蒸してできる。

五月節句には菖蒲と蓬（ふっ）を軒にさす。先祖棚や墓にもあげる。

おめしにちとして親の家にべぶまきを持って行く。

菖蒲をあげるのには次のような話がある。昔人間が大蛇に迫られて来て、菖蒲の中にかくれた。菖蒲の中にかくれると、菖蒲の香が強いで、大蛇は人間の姿を見失ってしまい、その人間は助かったという。

半夏生

田植えは普通六月であるが、田植もすみ、七月に入るとすぐ半夏生（はんげしょう）が来る。夏至から十一日目でハゲとかハゲッショと言ひ、梅雨もあがって本格的な夏となる。ハゲドツ（半夏齋）といってこの日は田畑の仕事を休み、飲食する風習もあった。またこの日は「こら」（煎り物をするこ）をたてない日とされている。煎りものもちろん油あげもしない。この禁を犯すと、その年は旱天で不作になるという。

さのぼい

「さのぼい」は早苗饗とも書くが、田植さのぼい、粟植さのぼいがある。さのぼいは「よき」（休息）ともいう。

そしてこのさのぼいは部落で期日を定めていた所が多かった。その日は皆仕事を休んで、各家でだんごを作ったり焼酎を飲んだりするが、部落一緒に集って飲み食いすることはほとんどない。

田植のさのぼいは、梶ヶ野では旧六月八日で新暦では七月八日にするようになった。あじさいや柿の葉などに赤飯をのせ菜師さあに供えている。柳井谷では景清の墓

の下にある十一面観音をまつる所から七月十一日を、折田代は十四日、浅井、猫塚、上諏訪は十五日、桂は十八日というように大体決まっていたが、機械植えになつたので次第に消滅しつつある。

粟植えさのほいも、昔は粟を大事にしたのでよく行われていた。梶ヶ野の場合は、粟植えさのほいには二才衆が皆そろって豊作を祈るため八幡神社に参詣した。この時各家でお金をつなぐが、家族の数に人間一人に五円くらいかけ、牛馬一頭にもいくらかけて金を出し合う。この経費から八幡神社の御賽銭を出し、残りは指導標を立てたり、飲み方を一緒にしたりしたものである。

七夕からお盆

七夕は一月遅れの八月七日。竿竹をつくるならわしがあり、家族一人に一本ずつ大抵つくった。墓の花立も新しい竹で作り、古いのと取かえた。墓掃除に行き、墓石の苔を落とし洗ったりする。こうした行事は六日にすませる所もあった。

こうしてお盆におせろさあ（精霊さま）を迎える。七日にあの世を旅立って十三日の夕方墓地を経て家に到着されるといふ。

迎火は十三日夜、門口で焚く。焚く所と焚かない所があり町付近では焚いた。笠木は「つが松」（松の油がしみ込んである部分）を小さく割って束ね、門口か墓前で焚く。梶ヶ野は迎火はしないで十四日、十五日の夜「つが松」を墓前に点じた。また手作りの四角の灯籠も点じたものである。

八日の夜、精霊様を迎える家もあった。太陽の沈んだ頃、御霊を床の間に飾るが、昔は袴をつけて門口に待ち、「おやっとさあぐわしたろ」とねぎらいの言葉で迎えたものである。

十三日の夜は初物の甘藷やとうもろこし、果物など供える。焼酎やお茶、御飯も供えたりした所もあった。

十三日の夜から精進料理で、十四日の朝から四つ組のお膳を精霊様に上げる。十四日に柳井谷、梶ヶ野は必ずソーメンをあげていた。

精霊様への上げものは、上諏訪は二人前くらい、梶ヶ野では十人前くらい、柳井谷では三人前くらいとそれぞれ違った。

「フケジヨロさあ」に供えている所もあった。「フケジヨロ」は普化精霊又は他精霊とも書くが無縁の精霊のことで床の間の自宅の精霊様の他に、横に別に料理をお

膳にのせたり、芋の葉の上にのせたりして供えた。

お盆の料理に「こづつどぶ」というのをつくった。これは大豆を幾日も陽に干して、それを小口で粉にし、その粉を水で合わせて適当な大きさに握り、竹の串に刺し、囲炉裏の灰に立て、時間をかけて火取る。これをお汁に入れたり煮しめにしたりとするとおいしいものであった。

こどもたちは「ぼんがま」といって自分たちで庭などでごはんやおかずをつくり、柿の葉などにごはんなどのせて食べるものだった。

盆に喧嘩すると精霊様が囲炉裏に蹴込むと言い伝えられている。

梶ヶ野では十六日の朝は早く起きて精霊様にお茶を上げて、戸口も開ける。精霊様はお茶一杯飲んで戸口から帰っていくのである。

十五夜綱引き

旧暦八月十五日は十五夜である。庭に臼を出して箕のせ、萩やすすぎや栗の枝など花瓶にさして箕の上に供え、里芋や団子も供える。

十五夜綱引きも大きな行事である。十五夜が近すくとこども達は藁貫いに各戸を廻った。折田や梶ヶ野や笠

木などではホラ貝を吹いて廻った。青年達は芯になるかずらを山から取ってきて、材料が揃うと青壮年が広場の木の大枝などに掛けて大綱をねり上げた。

月野は集落を一区・二区というように分けているが、北に位置する二区が中心になって各戸から藁を持ち寄り、中野の種畜場で綱をつくり、引き合った。綱引きで綱が切れない時は、藁切りで切り目を入れたものだった。



十五夜の綱作り

た。綱引きが終るとその綱を土俵にして角力大会があったが、太平洋戦争前か戦時中に途絶えた。

(井上徹志氏談)

恒吉は、昔は綱引きがあったそうだが、伊集院と島津の戦(庄内の乱と思われる)で負けてからなくなったそうである。

(鍋山重盛氏談)

折田も戦前まであったが、校区の違う坂元あたりまで藁貫いに子供たちが廻ったものである。できた綱は笠祇神社の前にとぐろを巻いたように積み上げ、萩やすすき子を刺し焼酎をかけて祝った。綱引きの綱を切つて坂元の子供たちが、持ち帰ろうとすると折田の子供たちが追いかけて取り戻そうとするのであった。綱引きの後は角力大会があった。

笠木は現在(昭63)も藤かずらを取ってきて、それを芯にして綱をねり上げる。こども会を中心に小学校の校庭で行っているが、昔は玉利商店の横の猫塚へ行く道路を入った左側の少し高台の広場で綱を作り、そこに祀つてから、郵便局前の県道で綱引きした。綱引きの終わった藁は持ち帰り、藁草履や縄などを作ったものである。現在には縄を祀るとき、老人クラブで藁草履を作つて一緒に祀っている。

桂でも綱引きがあり、笠木の綱引きが終わると桂まで引きに行くものであった。

十五夜の綱は水神の竜であり、竜神のおかげで水も豊富にあり、豊作となったので竜神に感謝し、これを送る行事であったが、これが綱引きに転化していったのではないかといわれる。綱を作り終えて、とぐろを巻いたように積み上げ祀るとき、末吉の光神あたりでは子供たちが綱の先端に、なすなどの野菜で竜の眼をつけてやるものであった。

方 祭(ホゼ)

豊祭とも書くが、本来放生会ほうじょうえがなまつてホゼとなったといわれる。放生会は捕えられた生物を放つ行事で、農作業で殺した虫たちを、収穫の終わるのを待つて供養することである。

恒吉は新暦十月十五日の投谷八幡秋祭りに方祭をする。月野は十一月三日の太田神社秋祭りが方祭、岩川は八幡神社の弥五郎どん祭りの日で十一月五日が方祭である。岩川は昔は「じゅがっいか」と言っていたが、旧暦十月五日をそのまま新暦に持つてくると収穫期より早いので十一月にしたものである。恒吉は旧暦をそのまま

新曆に持って来ている。坂元は十月十九日の蹲踞神社秋祭りに方祭をしたが、その後十一月三日となり、町村合併後は弥五郎どん祭りに合わせ十一月五日となった。

方祭には甘酒を作り、コンニャクを作る。甘酒は昔は餅米を飯に炊いて麴を入れ、長い時間まぜ合わせてつくったものであるが、その後、餅に搗いて麴とつきまぜる方法になった。後者が長もちするのである。コンニャクは、庭の隅や茶園の下に育てた。コンニャク芋を「たかおろし」ですりおろしたのを適當の大きさに平たく丸めたり、型にはめ角にしたりして灰汁の中で煮る。この生コンニャクをおろす時、手がかゆくなって困るものである。

方祭の日は親せきの家に行くものであるが、「ホゼイトコ」と言って知人の家など遠慮なく上り込んで御馳走になり、「マンカン飯」（赤飯）とコンニャクを竹の皮で包んだ土産を貰って帰るものであった。

弥五郎どん祭り（古代及び神社の章参照）

岩川八幡の例祭は旧曆十月五日で「弥五郎どん祭り」ともいい、岩川の方祭の日でもある。後に新曆十一月五日になり、昭和四十九年ごろから十一月三日から五日ま

で続くようになった。

十一月三日午前二時、馬場の青年たちによって弥五郎どん起こしの行事が始まる。起こし太鼓を打ちながら神社周辺を廻って神事が行われ、午前三時ごろ弥五郎どんの組立を始める。本体は竹籠状のもので、二十五反もある梅染めの木綿の単衣を着せる。昔は弥五郎どんの着物を縫うのは縫之園方限（吉井部落）の人たちに決まっていた。弥五郎面をつけ、鳳凰の冠をつける。黒鞆の小、鉢、印籠などつける。午前五時半、弥五郎どん起こしの太鼓が鳴り響く中で弥五郎どんは四輪の台車に立てる。こうして高さ四・八五mの弥五郎どんの偉容ができあがるのである。下駄や草履や傘などの奉納もある。

午後一時浜下りとなるが、子供たちに引かれた弥五郎どんを先頭に大傘、大幣を持つ先導の神官、社旗、笛や太鼓、幟、神輿、宮司、氏子と続く。順路は神社から岩川小学校を経て、河原、役場前、本町通りを鹿兒島交通駐車場まで行き、折り返して中央公民館で休息、上の通りを合同庁舎前を通り、神社へ帰る。

弥五郎どんは何分にも巨体で、電線など障害物もあり一時は下の小学校校庭まで浜下りしていたが、昭和四十三年頃、馬場の青年たちから町商工会に運営が移ってか

ら再び町まで浜下り行事が行われるようになった。

三日は小学校の校庭では柔道、剣道、弓道、相撲などが行われる他、太鼓踊りや棒踊りなど奉納される。三日は馬場の通りはバラやシヨケなど竹細工や鉈、鎌など農具の他、出店が軒を連ねる。出店の場所割は明治ごろもあつたようで、明治四十二年作成の岩川市場規約（坂口良一文書）は都城と志布志小間物商同業組合で作成されているが、これによると、都城と志布志から一名ずつ責任者を出し、準備の上、一番籤、二番籤と籤で決めるようにしてある。

弥五郎どんは三日夕方境内に帰った後、五日午後まで境内に置かれる。

弥五郎どんの体は竹籠であるといったり、衣をめくって中を見ると腹が痛くなると言ったものである。

また弥五郎どんは例祭日以外は出さないことになっており、以前郡役所落成の時、無理に出すように迫られて出したところ、今まで晴天であつたのが俄かに風雨が強く荒れたと伝えている。

六十三年、無形民俗文化財として県指定を受けた。

庭あがい

仕落しが済み、年内の農作業が終わると庭あがいと言って農家では一日仕事を休んで、まんかん飯か米ん飯（普段は粟や甘藷又は麦など入れていた）を炊いて鶏をつぶしたりして御馳走を食べた。

日待ち・月待ち

一緒にお籠りして、特定の日に出や月の出を拝む行事で、地方により月日は異なるが、こちらでは「日待ち」は十一月の亥の日にした。餅米を一升持ち、お金二銭を座元へ持って行き、餅を搗いて、それを夜通し食べながら朝の日の出を待った。朝日を拜んで皆帰ったが原始信仰に由来するものと思われる。この行事は一年中の農作業で虫けらを殺した弔いのために行うのだと川辺熊右衛門氏は語った。昭和初期までこの行事が残っていた所もあるが、比較的早く途絶えた。

月待ちの代表的なものは二十三夜待ちである。二十三夜様は旅人を守ってくれるといい、戦時中は特に盛んであった。出征兵士の家に集まって、まんかん飯やしめものなど食べながら出征兵士の無事を祈り、おそい月の出を待つものであった。

八期の節

旧暦八月一日は、ハッサツノセツで、十五夜の用意をするもので、藁もらいに使うほら貝の口に竹をすげる。この日は蕎麦をつくったり、米飯を食べたりした。

講

宗教上の目的達成のため、集まって作る信仰集団を講というが、民間に浸透するにつれて、レクリエーションの性格も濃くなり、信仰と無関係の寄合いも講と名付けたものが発生してきた。

牧部落文書（近世参照）にも講は信心獲得のためにあるのに、本来の目的を忘れ、酒や御飯などの御馳走を食べるだけで終わっていると戒めているが、慰安もままならない昔の世で講などの寄合いが楽しみの場であった。

一向宗禁制関係の講は近世欄に記述したが、その他の講として庚申講、観音講、お伊勢講、霧島講など宗教関係や農作、畜産などの講もあった。

庚申講

庚申かのとるの日の信仰で、本来道教の説に仏教や神道が結びついたものであるが、年の初め、庚申の日に一回、又は

春秋二回の講が普通であった。庚申信仰は、その夜身を慎しんで徹夜するものであるが、農村では次第に転化して農業の神様とし、豊作のための講ともなった。

梶ヶ野では、庚申講は太平洋戦争前までであった。年二回十一月と正月に米五合と、その夜の経費を持ち寄り、床の間に庚申さまの掛軸をかけ、牛馬の彫刻などを置き、飲み食いした。

庚申講を続けて、三年目毎とか、閏年毎とかに講衆が供養の碑など建立して奉納したものである。

須田木青少年館（須田木小学校跡）の後に川が流れているが、川を渡った向こうに山のはなが迫っている。その突端の上の狭い平地に幅二十二cm、奥行十七cmくらいの庚申塔があり、五輪塔も数基転がっていた。正面に阿弥陀三尊（阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩）を表わす梵字の梵字が刻まれ、その下に「奉寄進石上橋一字敬白」とある。右面に「須田木村二才中 庚申□□八寄附□□□□講中」、左面に「宝永七庚寅三月朔日」とある。この橋はここへ詣るためにかけた橋であろうか。庚申碑と五輪塔など須田木青少年館の庭に保存のため移した。（昭63）

坂元の大隅北校区公民館の東南に道路を隔てて蹲踞神

社があるが、社前に手水鉢がある。神社が現在地に宮岡から移転した時、鉢がなくなり柱石だけになった。柱名の正面に「奉建立御宝前」、右に「寛文六〇〇天二月吉日」、左に「願以此功德施一切衆生我人共成仏」の刻字が判読される。裏に「庚申」と読めるので、この手水鉢は庚申講衆が神社に奉納したことが分かる。

桂に小祠があり、木像二体を祀っているが、その庭に墓石と石塔がある。台石の上に棹石があり、その上に台座があり笠石がのせてある。台座の上がないので分からないが、石灯籠ではないだろうか。棹石に「奉寄進籠庚申講」とあり一面に「元禄十二己卯天三月吉日」他面に「講衆廿二人敬白」とある。

坂元から川路山への農免道路をつくる時、坂を下ったあたりで発掘された高さ三十cmくらいの石造物は、下に二体の猿が向かい合って刻まれ、その上のだ円の中に人像二体が刀らしいものを持って坐している。刻字がないので判別し難いが、庚申塔に一猿、二猿の例もあるので、庚申の項に記しておく。この像は保存のため、郷土館に展示している。

観音講

旧の正、五、九月に床の間に観音の掛絵や、観音像を祀り、よい子が授かるようにとか、元気で育つようにとお願ひする女だけの講である。

昔は各集落で盛んに行われたが、次第に衰微し、今は年一回にして、梶ヶ野、東迫、狩谷などに残っている。また花見や婦人会の交替時期と一緒にしている所もある。

馬のちだし

馬ん血出しというのはあった。血出し講ともいったが、地域受持の伯菜どん（獣医）へ、各戸から、粟一升ないし三升持ち寄り、粟四俵、五俵にして持って行った。馬が死んだ時は証明は無料で出してもらった。

血出しは馬牛の足をくくって、足から瀉血したり、肩から尻へ濡れ布をおいて、その上に焼金を当ててゆくものであった。尻尾の先はじかに焼金を当てて煙が出るものだったが、馬は別に暴れもしなかった。

血出しをした夜は、まんかん飯を焼き、蕎麦を打って飲み方をした。

この血出しというのは馬の「ねら」の予防であったよ

うで、ねらの薬も飲ませた。

お伊勢講

本来、正、五、九月の十一日か十六日にしたものであるが、恒吉の一部には残っている。

十一月の末ごろ、部落でお伊勢講の座元をする家（期日は座元の都合のいい日であった）へ神主を招いてお祭りした。神様はお厨子に納め、年一度座元を変え、お祭りがすむと次の座元へ送った。講の経費は米五合と金十銭出し合い、後は座元が出すことになっていた。こうして集まったのは神主へのお礼をし残りはその日の飲み食いにあてた。この講は各戸から一人ずつ出た。お伊勢講をまつると身体が強くなると言われていた。

野町部落は現在も残っている。四月十六日と十月十六日の年二回お厨子を送るが、昔は三味線、太鼓で送ってきたものである。座元ではそうめん、酢の物、豆や煮しめなどの御馳走をする。現在（昭62）はお金二百円を集め、半分を座元にかけて、後は飲み食いに当てている。なお野町では葬式の時は講衆が葬儀係になって、部落の加勢なども貰っている。

上野部落は年一回お伊勢講を九月十六日にしている

が、ここは火の祈念講を十月二十四日に行っている。

平原部落は年二回であったものが、その後九月十六日に御厨子を持ち廻りしていたが、それも途絶えた。

川路山にも伊勢講はあったが、戦前には途絶えた。

伊勢信仰は国民の信仰の中心で、生涯の中で一べんはぜひ伊勢参詣をしたい念願があるわけで、それが出来ないので、こうしてお伊勢様を祭る親睦の集いが生まれたのだが、昔は初穂米を背中に負うて、踊りながら伊勢詣りをしたそうだ（野上田愛五郎氏談）。

伊勢講は昔から恒吉では各部落ごとに行われて来たのであったが、明治六、七年ごろになって中絶した。それは各方限にあった神様を、須田木高屋御鎮座の天照大神を祭る日天子神社に合祀したためである。ところが、その後二、三年経って、またもとのように各方限に御遷座になったので、もどおり伊勢講が行われるようになった。この伊勢講は病氣、流行病、又は災難に逢った時、それを除くために昔から行われて来たものであろう。それに伊勢皇大神宮は日本国中の崇廟であるので、その尊さを人民に知らせようとした為であろう（勝目文書及び野上田愛五郎氏談）。

永田勘右衛門日記（明治四十年）に次のような記録が

ある。

「子どもの生れかねる時は、「伊勢」の字を紙に書いて妊婦に飲ませるとよい」

霧島講

久木山部落の集会所のある十字路から菅牟田よりの右手土手の上、畑の隅に石室がある。文字は見出せないが、そこからは霧島の高千穂が望まれ、石室は高千穂に向いて立っている。

久木山部落の山本進氏の話によると、昔、菅牟田の森右衛門という人が、霧島に参詣して、帰ってから記念に建てたと言ひ伝えられており、山本氏の子供のころは既に建てていたという。一般に「霧島さあ」といわれている。

恒吉では、お伊勢講とともに、霧島講も昔からよく行なわれてきたが、長江の馬場方限の場合、記録によれば、それまで三十年ばかり休んでいたのを大正十四年十月十八日から又もとのように始めたのである。その時馬場方限では話し合いによって、年長の者から先に霧島へ参詣に行くことになり、その年は勝目政隆（七十三歳）、宗像政包（七十一歳）の両人が参詣することになった。

しかし老人のことだから政隆の長男琢磨が随行することになり、二泊三日で参詣をすまして帰って来た。これから毎年参詣をするようになった。その後また途絶え、昭和四十年頃復活したものの二、三年で途絶えた。

恒吉の平原部落でも霧島講があった。毎年旧九月二十日であったが、新暦の十月十日に部落の代表が霧島に参詣に行くようになった。その経費はすべて部落で出し合う。参詣から帰る日は、さかむけに三味線太鼓で賑やかに上の貝ヶ塚段まで迎えに行ったものである。迎えに行くときは付近の四部落一緒になって行ったという。平原部落では昭和十二、三年ごろまでであった。

霧島講はいつごろから始まったかわからないが、「古人が崇廟の尊いことを知らせるため、また天降りされた神様に無病息災武運の長久を祈る為」であろう。

（勝目文書・野上田愛五郎氏談）

川路山の霧島講は昭和三十九年まで続いたが、沖上部落の霧島講と共に最後まで続いた方である。

霧島神宮で十月ごろ行われる豊年祭の時、川路山部落から代表が参詣に行った。昔は二人行ったが、絶える前のころは四人宛行った。神宮では祈願料を五百円納めた。代表で参詣した人は、神宮で部落内の戸数だけお札

を買って来て各戸に配る。昔はずっと歩いて行って一泊して参詣して帰った。代表が帰ってくると、部落ではサカムケをして待っており、部落中集って宴を開いた。そしてその晩、次の参詣人を抽せんで決めた。参詣人の経費はいっさい部落で持つことになっていた。

松田部落でも霧島講があった。代表が霧島神宮までお参りして帰ってくる時は皆で上の段まで迎えに行ったものである。松田から運動公園に上る途中に松田の墓地がある。この墓地から県道を隔てた西の方に小高い丘があり、そこに霧島さあが祀られていた。今は削られて跡形もない。

霧島さあの下になるが清水が今も湧いている。この水を「神様ん水」と呼んでいた。病人がでるとこの水を汲んできて飲ませたもので、よく効くといわれた。また病人もこの水を飲みたがるものであった。

苞内神（つとうがん）

梶ヶ野部落の榎方限では苞内神を祀っている。年一度十二月十七日には、各戸で藁苞を作って一ヶ所に寄り、内神祭りをする。ヒを切って作ってきた藁苞に包み込んで持ち帰り、普通床の間の上の方に祀った。内神祭り

は、部落の春日神社、歳の神の祭と一緒の日である。

上諏訪の山下家も苞内神を祀る。戦争中、山下二次氏の子科練の息子に、この苞内神の中の神様をしの竹の中に入れて持たせてやったが、息子は終戦で無事帰ってきた。二次氏の父は西南役に出征したが、この時苞内神をお守りとして持って行ったが無事帰って来たという。

味噌

卯味噌、辰酒と昔は言っていた。これは味噌をつくるのは卯の日を嫌い、醤油をつくるのは辰の日を嫌って、これらの日避けて味噌、醤油をつくるものであったことからきたものである。卯の日に味噌をつくると、「うったの味噌」になるといわれる。「うった」というのは出発の事で、死んで行く時、すなわち葬式の味噌になるという意味である。

山の神

山仕事をする人や、狩猟にたずさわる人を守護する神で町内にも小字として残っているものだけでも、梶ヶ野の山神字、笠木の山神田字、小松の山神田字、太田尾の山神字、広津田の山神字がある。

梶ヶ野の山神字の山神は、田圃の傍に小高い岡があり、雑木が茂っているが、その中の大木を山神として注連をして祀っている。自然木を神としている例は、現在では珍しい。中に入って草木を払ったりすると腹が痛くなるといって近づかなかったものだという。

梶ヶ野には他に、川路字に寛政十六年九月の石室と唐尾谷字に寛文十一年正月の石室の二つの山神がある。

笠木の鍋に山神田字があるが、後述の「中山神」の田であったのか、別に山神が近くに祀られていたか、はっきりしない。

恒吉の小松に山神田字がある。この付近にも山神があったはずであるが、調査したけれども分からなかった。

月野の太田尾にも隣接して山神字がある。曾於郡医師会病院付近であるが、山神は不明となっている。

月野の広津田に山神字がある。山神字に住んでいた中江正八の宅地裏山に石塔の山神があったが、牛か馬がこれを壊してしまったので、新しく角の石塔を作って祀ったという。(正八の子で志布志に移住した中江信蔵氏談) 広津田の和田操氏も子供のころ、石塔を見たというが今はない。

ここにはムクロジの大木があった。ムクロジの実は羽

子つきの翅の先につける実であるが、子供たちがよく拾いに行ったものであるという。

町誌初版(昭44発行)に、山神の松というのがある。

月野の役場支所の東南七、八町の所にある一小丘である。丘の上に数株の老松があり、枝振りがよく、風光賞すべきものがあった。その中の最大のは、廻りが一丈余で、俗に天狗松といっていた。これは広津田の山神字か、その上の国見ヶ丘字付近と思われる。

この松については、もう誰の記憶にもない。老松を山神としていたものか、老松の下に山神の塔があったものか今は判らない。

坂元の土橋には石室の山の神があり、年神が併記されている。

川路山の六地藏の近くに石室の山の神があり、岩切家で管理している。

山の神三神

川床の仏の辻、笠木、神掛にも山神がある。川床の山の神を「入口の山神」といい、笠木の山の神を「中の山神」、神掛の山の神を「奥の山神」といい伝えられている。

川床の山の神（入口の山神）

川床部落は上の方と下の方に分かれているが、この中に仏ン辻がある。坂を登って行って、柳井谷と白毛方面へ通ずる道に出る三文字の左上方の丘がそれである。

仏ン辻は以前は放牧場で、戦前放牧のため堀が築いていた。丘の下にゲートボール場があり、その上に共同墓地、そしてその上に川床部落の集会所がある。集会所



入口の山の神（川床・向って左）

の手前右の一段高い所に大きな桜の木が植えられ、その下に馬頭観音が祀られている。馬頭観音の左奥に山の神があるが、屋根形の石室である。その端にもう一基同じような石室がある。

この山神は、近くに「猪ヶ迫^{いぶが}」字があるように、昔はよく猪を獲ったので、猟師達が山神を建てたといひ伝えられている。（川床部落の竹下栄熊氏談）また近くに小鹿倉字もあり、この辺りはかくら山が深く、笠木、菅牟田方面にかけて、猟場であった事が想像される。

またこんな話もある。

昔、島津の殿様が猪狩の時、猪を何頭獲った時は、この石を建てるということにしてあったが、その目標の何頭かに達したのであの石を建てたという。これは猪の供養塔ということであり、狩猟者が建てた猪などの供養塔は他にも例がある。

仏ン辻の山神のすぐ傍に、松の大木があり、一丈以上も廻る大木であった。下の方から枝がついていたので登れたが、この大松にのぼると志布志の海が見えたという。今はない。また杉の大木もあったという。

太平洋戦争中まではこの場所で相撲がはずんだとい

う。九月（期日は不定）、部落の人達は重箱にご馳走をつくって集り相撲を楽しんだが、これは山ン神の方ではなく、馬頭観音の前での豊年祭りである。

馬頭観音は、明治四十三年三月十日建立、市吉川床青年会と刻してある。

笠木の山の神（中の山神）

笠木の県道から猫塚方面への道路を入ると六地藏がある。そこを左へ折れて行くと奥の方に「中の山ン神」がある。社は二間に三間くらいの社であったそうだが、昭和十三年の台風で倒れたので、十六年ごろ一間半と二間くらいに小さく造営された。しかしそれも古くなったので、寄付金により再建され六十一年三月完成した。大きさは間口三間に奥行四間と大きい。

山ン神祭は、正月十六日、五月十六日、九月十六日に行われていた。それも旧暦であったが、昭和四十二、三年ごろから新暦で行うようになった。正月と五月の十六日は笠木部落内の各戸から一人宛出るが、九月十六日は部落内各戸全員、大人も子供もでる。各戸から米三合ずつ集め、三角の握り飯を作り、出てきた皆に配った。

太平洋戦争に入るころまでは握り飯の他、煮しめやガ

ネ（餅米の粉に甘藷など千切りにしてまぜ、油で揚げたもの）など作って持ち寄って、境内に藁を敷いて皆で食べたものである。

山ン神は、東笠木部落と西笠木部落が一年交替で係を勤めているが、現在（昭63）は旧の六月第一申さきの日に山神祭を行う。当日は早苗さのほいと六月灯も併せて行うが、子供会を育成するため、六月灯もするようになった。子



中の山の神（笠木）

供会が活動し易いように、第一申の日に近い土曜日に期日を変更する場合もある。

昔は、七月の下旬、粟植えも済んでさのぼりには、こわ飯を焚いて椿の葉にのせ、別に焼酎をカラカラに入れて持って行く。椿の葉にのせたこわ飯に焼酎をかけて山ノ神様にあげ、自分達も社の板の間で食べていた。この風習は今でも残っており、山ノ神祭りと一緒にいうさのぼりには、柿の葉に赤飯をのせて焼酎をかけて供える。

山ノ神は、もと三柱であったが、明治の末頃、女神一体がなくなった。昔から時々堂にかんじん（乞食）や六部が泊まっていたが、彼らの誰かが持って行ったのではないかと言われていた。御神体は樟製であるが、今は男神二柱だけが安置されている。

昔は、川床、笠木から神掛にかけて山が深かったというが、よく猿が来たという。猿が来ると生柴を散らしているので分かった。子供達は何か来たといって逃げたものである。猿は山ノ神にも詣（も）いで来たのであった。また話によれば、笠木は火事が多い所であったが、この山ノ神を建ててから火事がなくなったという。

神掛の山の神（奥の山神）

入角^{いっすん}のカクラに山の神の祠がある。横一、二m、高さ一、五mくらいの社である。中に三体の木像が安置してある。二体は男神（衣冠座像）で一体は女神であり、年代不明であるが、笠木の山ノ神と似ている。二百年は経っているという話もある。

この入角の山ノ神は、もと神掛の永野時範方の上にあったのを、明治二十年ごろ、それほど遠くはないが、神掛限の集会所のある入角のカクラに移転した。

カクラは鹿倉と書くが、狩倉のことで、武士が練武のため狩猟を行う場所であり、そのため一般の狩猟を禁止していた所である。

以前は建物も大きく、九尺四方くらいあり、その中で部落の寄合いなどした。又旧八朔の「よく」（農休日）の時は、焼酎や握り飯を持ち寄って「さのぼい」の飲み方をした。

神祭りは現在（昭63）原田、黒木、重信の三家で、十一月の勤労感謝の日に行っているが、社も古くなって傷んだので、入角の公民館に移転して皆で管理するようにした（移転は平成元年）。

この山ノ神にも山猿が神まいりによく来て、啼いたという。

旭ヶ丘の鳴神なるかみ

旭ヶ丘の町水道高圧配水施設の隣に雑木林の一画があり中央に塚がある。塚にも大樹がある。八合原の北端で昔はうっそうと茂った森で、よく雷が落ちたという。落雷による死者も出たので、ここに鳴神様を祀ったそうだが、字名も鳴神で、雷に由来する字名である。

塚の所に自然石があるが、これが鳴神様で、この丘で



奥の山の神（入角）

は雨乞いも行われており、終戦後の早ばつの時の雨乞いが最後であった。

ここに立ち入ったり、木を伐ると腹が痛くなったり髪がなくなるといふ。このようなたたりがある例は梶ヶ野の山神字の山神にもある。ここは自然木を神の依り代として祀っている。より古い信仰で、薩摩半島は森殿、大隅や奄美では森山もみやまと呼ぶが、森神はたたりがあるのが特色である。

旭ヶ丘の鳴神は、塚や大樹、言い伝えからして最初は森の一区画か大樹を祀る型の森神ではなかったかと思われる。後世になって自然石を置き雷神を祀ったのではないだろうか。

もう一つの考え方は、この辺りは平原城の本郭跡と思われるが、ここにある塚は戦死者を葬った千人塚とも考えられる。しかしそれを証明するものはない。

保食神

保食神は五穀をつかさどる神、食物の神で、本来、豊受姫を祀るが、岩川に三つある。

郷田の保食神は昭和三十二年五月建立で、郷田公民館の傍にある。屋根型の笠石の下に「保食神」と刻んだ樟

石があり、台座の正面に牛馬が左右から向かい合った浮彫りがある。

郷田部落は、もと上の県道の傍に「供養松」が四本あったが、それを伐ったので、その代わりとしてここに保食神を建てた。保食神について部落では昔から馬頭観音といっているが、供養松は元来馬頭観音の所在を表わしている所が多いので、馬頭観音と併わせ祀っているのである。

保食神の祭りは毎年十月二十三日（昭43当時）に部落で神主を頼んで行い、部落の家が交替で座元をした。この日は各戸にある内神の「ヒ」もそこに持ち寄って焼却し、新しく内神の「ヒ」を神主にきって貰いお祭りをした。これらに要する経費は各戸五〇円ずつ出し合い、夜は各戸から出て酒宴を開いた。

なお、郷田部落は明治四年岩川郷建設のころ、谷山から移住して来た。谷山は伊勢家の所領であり、その家臣たちである。墓も谷山から持って来たが、それ以前から住んでいた人は二戸であった。

現在（昭63）は、十八戸くらいの中で十戸が十二月十六日に交替で座元をして保食神を祭り、また各自の内神の「ヒ」をきって貰う。その経費として各戸千円ずつ出

している。

中ノ園の「保食神」は、道路の曲がり角の木下氏宅の下にある。郷田のものと同様に、屋根型笠石の下の棹石に「保食神」と刻字してあり、その下の台石の正面には馬の親子、横面には左右とも牛を刻んである。建立されたのは昭和八年四月一日で、中ノ園と刻字されている。

岩川の馬場の塵焼場の道路向かいに、昭和三十一年三月建立の保食神がある。

瘡ソ踊り

ほうそが流行すると、「ほそ踊り」を踊って、ほそを追いかけておとした。「ほそ踊り」はできるだけおかし



郷田保食神

な服装をして、草切籠を二人でかつぐ。この二人は別に変わることもなく終日同じ人を通した。その籠の中にぼろ布を入れその上に徳利を据える。これに太鼓、三味線がついて、部落内を皆酔っぱらって踊り廻るのである。家々では籠の中の徳利に焼酎を貰い、また「はな」も貰う。こうして貰った「はな」は帰ってから「はなびらき」をして、おそくまで飲んだり、踊ったりした。

この「ほそ踊り」は川上の方の集落から、川下の集落へ踊り継ぐものであった。一つの集落が自分の集落を踊り廻って次の集落の入口まで来ると、今度は次の集落の人たちが、それを引き継いで「ほそカンジン」を送り出して行くものであった。こうした風習は明治二十七、八年ごろまで行われていたようである。

(柳井谷 新穂利助氏談)

ほうそうが流行し出すと他より先に踊らないと、自分の集落に流行するようになるといった。梶ヶ野では折田や桂や蕨谷まで踊って行った。また佳例川の割子田から折田へ踊ってきたこともあった。折田は財部の中野にも親せきがいるということで、そこまで踊りに行ったこともある。折田、梶ヶ野では、大正の中ごろまで踊ったことがある。須田木では、川へ流さんならと言って太鼓、

三味線で踊ったり、麦藁で人形を作って川に流したという。須田木も大正の中ごろまで踊ったという。

(川辺熊右衛門・小浜重良・富吉慶二の各氏談)

魔除け

あわび貝を外に向けて家の戸口かけると、魔除けになるといわれる。

八ツ手の葉を戸口かけると、伝染病が防げる。

竹の皮に焼木で穴をあけたのを門から内に掛けると目の病気をしないという。昔はやはり目が非常に多かったようである(山下二次氏談)。

魚

昔は岩川の魚屋は志布志まで魚買いに、魚でごをかついで行った。また志布志や串間あたりから汽車で魚でごを持って一軒一軒売って歩いた。恒吉・坂元方面へは福山から魚売りが来た。帰りは米や粟など買って帰った。牛根の境浜からは、市成や恒吉まで魚売りが来た。また境浜からは塩や海藻も持って売りに来た。海藻はホンダワラといって、実のついているのをおしめ(にしめ)にして食べた。

食べもの

麦の飯には味噌の冷汁をかけて食べた。蕎麦そばを大まかに切つて、そのまま鍋で煮た「ソマンシュイ」もおいしいものである。

吊りからいもを焼いて食べると独特の甘味がある。生大根を軒下にかけて乾燥する「ついでこん」や、大根の葉を乾燥した「ホシナ」は野菜の品切れの時季用のもの。

あま茶は普通の茶の木とは違う灌木、棕の実、タブの実や樹、ヨモギ、タラの新芽をゆがいて酢醬油で食べる。タビナ、ゴビナも田圃から取つてきて、殻のまま煮て中味を取り出して食べた。里芋の葉柄を干してつくるずいき、こちらではカンピョウと言っていたが、これもいいものだ。

スミラというのはノビル的一种か、らつきょうの葉のような葉が出る。おこし火を素焼の壺に入れ、その上にスミラの鍋をかけ幾日もかかつて煮る。スミラが軟かくなると麦の粉をまぜて食べる。少しにがみがあって、あまりおいしいものではない。これは飢饉の時の遺物である。

焼酎つくり

明治四十年前後までは、部落で共同で焼酎を造った。焼酎を造ると税金を払わねばならなかったが、税金は七十銭か八十銭くらいのものであった。モロミを二石なら二石の許可を受けて検査を受けると、その晩の中に夜通し焼酎を造った。またモロミも造った。焼酎官が廻つて来たが、その時は許可を受けていない分は山の中にかくしておいた。

弥五郎どんの足跡

下須田木の富吉慶二氏宅の裏は山になっているが、その後、平うしろに久保正行氏宅がある。ここは迫になっているが、五六畝の窪地があり、これを弥五郎どんの足跡と言っている。昔は村有地で、野原であり、よく放牛するものであったが風の強い日など風を除けるため「弥五郎どんの足跡い、牛をつなげ」と言ったものである。

(富吉慶二氏談)

国道二六九号線を岩川の町から坂を登り切った所で別府への道路が分かれているが、この三叉路の北側に弥五郎どんの足跡がある。一、二反の窪地で弥五郎畑びごうけと呼ばれていたが、土地改良で現在はなくなっている。

(古代に別記)

孟宗竹

恒吉の投谷八幡神社の管下では、孟宗竹を植えると、つまずきに逢うと言いい伝えている。

病気の神様

川路山を川路原の方へ一〇〇m位行くと左に墓地、右に畑があり、くね茶が植えてある。その中に高さ六〇cmくらいの碑が二つある。左は上部が欠損しており、右は面が荒く自然石みたいに見えるが、これを「いぼん神さあ」と呼んでいる。

いぼができたなら、炒った大豆をいぼの数だけ供えて拜んだ。

別府に板碑と石室が並んでいる。(金石に別記) 石室の中に阿弥陀如来と六地藏が刻んであるが、昔からヒヂッドンと呼ばれ「いぼん神さあ」でもあった。いぼができたなら、いぼの数だけ大豆を供えて拜んだ。また年の数だけ大豆を上げたとの話が残っているが、いずれにしても大豆を上げて祈ったのである。

柳井谷に景清の墓(鎌倉時代に別記)と呼ばれる大きな



眼の神様 (伝説景清の墓)

石塔がある。平景清は源氏が栄えるのを見たくないといつて、眼をくり出したという伝説から、眼の神様として崇められ眼を患った人たちはここにお詣りし、水輪を他の石などで擦って粉として持ち帰った。その粉に水をまぜ、その水で眼を浸したりするためであったが、永年にわたり削られた水輪は大きな窪みとなって残っている。

恒吉春田の西ミエさん方の上の山に「オネツの神さあ」が祀ってあったが、今は東の向いの岡の中腹に西家の内神と共に祀ってある。素焼の唐獅子二体の神さあである。オネツに掛かった時は、火吹き竹と塩か焼酎など持ってお詣りしたもので、よく効くといわれる。

「いぼん神」は川路山・神牟礼線から清津野への旧道

入口にもある。

火焚き

風呂やかまどを焚く時、農家では「穂先を焼切らんごつ」といって薪の根元からくべるもので、商家では逆に「元を焼き切らんごつ」と裏先からくべたものである。農家は農作の願いを穂先に掛けており、商家は元手を減らさないようにとの願いをこめたのである。

乳歯が抜けたとき

乳歯が抜けたことも達は、上歯は床下に、下歯は屋根に「すすめどんとねずんどんと生えぐらんご」と言っけて上げるものであった。

第四節 芸 能

甚句ぶし

日にち毎日 高せがのぼるよー
のぼる高せは 一度は下るよ

トコドスコイ トコドスコイ

囃

一でたからを失いて

二で日本をさわがした

三で士はいせられ

四つ四つ足しゃふみひろげ

五つ以前を大切に

六つむしように髪きらせ

七つ何かは是非をかけ

八つ屋敷を売払い

九つこうして居られよか

十で東京の車引き

トコドスコイ トコドスコイ
揃うたよ 揃うたよ 踊い子が揃うたよ

稲の出穂よいも まだよう揃うたよ

トコドスコイ トコドスコイ

囃(前に同じ)

(東馬場 藤崎ヨネさん)

だんぱっちゃん節

いやだいやだよ だんぱっちゃんないやよ
元の庄八ちゃんが ましたもの

ハイハイ ドンドン

囃 奥州街道に 南瓜が転んで

まっかい血を出して 西瓜のまねする

ハイハイ ドンドン

通うておぢゃんせ 一夜さ越しに

毎晩おぢゃれば 人が知る

ハイハイ ドンドン

からすなく声 気にやかけやるな

からしや その日の役でなく

ハイハイ ドン ドン

身分違^ちげだが 離るぢゃないか

深し ぼんのうのなきうち

ハイハイ ドンドン

(藤崎ヨネさん)

地 搦き唄(地しめ唄)

おてんどだけから 小林ゆ見れば

ア ヨイヨイ

何れ 小林や米どこい

囃 ハラヨチトコセー ヨーイヤナ

ハレワイナー コレワイナー

サットコセ サイヨ サイヨ

花は霧島 煙草は国分

燃えてあがるは ヤレ桜島

囃 (前に同じ)

雨の降る日は 天気まで悪い

ア ヨイヨイ

きじのめんどいや やれ女鳥^{おなこ}じや

(前に同じ)

(藤崎ヨネさん)

地 搦き唄(都城系統)

あら そいぢゃえー 志布志や

志布志やしをらし大崎までも

あいに流れる菱田川

囃 ハージャンドが ソーラ

へハ ハララガヨイヨイ

ヨイコラ ヨーホイ トコ

ヨイトコセー

長い街道^{けど}ぢやよ 福山^{ふくやま}ん街道は

往きも戻いも あきがつく

囃 (前に同じ)

(藤崎ヨネさん)

そばきい踊り

恒吉野町の「そばきい踊り」は、浅井の西川義雄が来て教えたと言われている。もとは青年たちが踊っていたが、恒吉農協婦人部長であった能見すな子の肝煎で、婦人たちが踊るようになった。

昭和三十五年ごろ、県の農民祭が加世田市で開催された時恒吉の「そばきい踊り」は噺歌郡代表として、出場



野町そば切り踊り

した。これは各郡から一組ずつ代表が出場したのであったが、この踊りがみごとに優勝し、カップと賞金を獲得した。当時NHKからも放送された。翌年は優勝カップ返しに加治木の農民祭に出場した。優勝した組は翌年カップ返しのため翌年の会場へ出場することになっていった。

この踊りは大隅町役場庁舎の落成祝いの時に踊り、五郎祭りにも踊った。四十年ごろの踊り子は、能見すな子、永田すみえ、西すみ、盛もい、能見ふぢえ、馬庭はつえ、小泉てるなどであった。

踊りは婦人ばかりで七、八人、歌をうたいながら踊る。楽器は三味線と太鼓。この場合、しぐさをする人は歌はうたわないでしぐさだけし、周囲の踊り子がいっしょに歌をうたってやる。そして踊る人は大体しぐさ歌ごとに入れ替わる。

踊りは最初、屋根裏に藏ってある吠入りのそまをおろす所で、そま吠をつきおろすしぐさをしながら、

「おろし方んだんぢゃ」と踊る。

それからそまを「み」でひるしぐさで

「こいからひるかただんぢゃ」

へひきかただんぢゃ」うすでひくまねをする

「こねかただんぢゃ」 だごをこねるしぐさ

「おしかただんぢゃ」 棒でひらたくだごをのぼすしぐ

さ

「きりかただんぢゃ」 大きな包丁でできるまねをする

「かまでいがかただんぢゃ」 釜でゆでるところ

「たつむんなしばだつぐん」

「くべてんくべてんすももんぢゃ」

そこで火おこしで吹く

「ふきかただんぢゃ」

バケツをもって来て、底をボンとたたいて

「あげかただんぢゃ」

あげたそばをざるにとりあげる。そしてざるに入れたそばを頭の上のせて売りにいく。

「今から売리카ただんぢゃ」

「そばよ そばよ」 「いっぺが十円ぢゃ」

買いにいく人が二人、小さいざるをもって少しずつわけてもらうしぐさ。見物人の前にも行って売るしぐさをする。

そし売り上げ勘定の段に入っていく。

「さんよの段ぢゃ」

踊り手はその場に坐りこんで、お金のさんよをはじ

める。これは前もって、紙をきったのを懐に入れていて、それを取り出しながら「いっめ、にんめ、さんめ、……じゅうめ」五めまでかぞえる。

そして「ないもかいもうっほげた」と歌って、ざるを逆さに頭の上にせると、そのざるはあらかじめ紙で貼ったざるなので、ざるを頭の上に強くのせると、紙は破れてそこから踊り手の頭が出て来るので、ここで大笑いになって、終りとなる。

「そばきい踊り」の服装は、着物は紫地の絆纏型で、袖は元禄袖、襟には両襟胸の所に、金銀紙を交互に斜めに貼る。着物の下に桃色のお腰をする。帯は伊達巻である。頭にはたおるをかむる。

(恒吉、野町、永田すみえさんによる)

恒吉口説くど

「恒吉口説」は男でも女でもよく、支度は随意で、大体四人で踊るのが普通である。内容は財部に伝わる「新四郎さんとおすえさん」であることがわかるが、恒吉では、これを「恒吉口説」として、よく歌い踊られている。

恒吉口説

一つとのーおよのえー人も知らない向かえ町

あめやが娘におすえとて さてそうかいなあ

二つとのーおよのえー二人の親たちや知らねども

新四郎さんとおすえさんなよか仲ぢや

さてそうかいなあ

三つとのーおよのえー見れば見るほどよか嫁女

新四郎さんがすつきやるはもつともぢや

さてそうかいなあ

四つとのーおよのえー夜は雨風ばん芝屋

おすえさんが芝屋は夜明けまえ

さてそうかいなあ

五つとのーおよのえーいつもあがらぬお煙草を

おすえさんに会うとて火を一つもらいませよかい

な

六つとのーおよのえー難かしことが出よたときや

新四郎さんに頼んでさばきませよ

さばかゆかいなあ

七つとのーおよのえー何をゆおよも語るよも

おすえさんのおなかにほんがでけた

おやそうかいなあ

八つとのーおよのえー薬師の数々願かけて

おすえが一緒の願ほどき さてそうかいなあ

九つとのーおよのえーこけにやはやらん髪ざしを

おすえさんにささせて品をみる

さてそうかいなあ

十つとのーおよのえーとんと屋敷に倉建て

おすえさんと新四郎さんがさきの世で暮そうカイ

ナ

この「新四郎さんとおすえさん」の唄は、飯田、桑之
追、梶ヶ野にもある。

有明町蓬原あたりで、「恒吉口説」というのが唄われ
ているという。その唄は恒吉ではうたわれていない。し
かしその唄の主らしい心中の話は残っており、徳泉寺の
先、澱粉工場のもつと先の左道下に、その心中墓という
のを調査した。台石はひとつで、棹石が二人分載せてあ
る。この形からそういう話が生まれたのではないかとも
思われる。一つの棹石には「花心童子、享保九年三月九
日、助七子」とありもうひとつには「幼露童女、正徳四
年四月十二日、四郎兵衛娘」と刻んである。両墓は男女
ではあるが、何れも童子童女で、そのうえ死亡年が十三
年も差があり、全く心中墓とは考えられない。この墓は
改葬によりなくなった。

次にその「恒吉口説」を記す。これは有明町蓬原盆踊
一五種目の中の二番目に歌舞するという。

恒吉口説

今の世間は面白けど

どこの事やと尋ねて聞けば

ここは大隅恒吉村よ

お菊は名高な心中をしたと

言うがまことか不憫な事よ

同じ捨てたる其の名をきけば

年は三八源左エ門よ

同じ捨てたる其の名をきけば

年は三五のつぼみの花よ

やがてお鶴はお菊と言うて

貰い取られしいわいの言葉

明日はお菊は嫁入りなると

何やかやとて その折ふしに

母もききやれ父上様も

聞きやれ我身はむかちや行かぬ

何卒いへんをして下さんせ

ともかくにもむかれておいで

末はそなたに委する程に

そこで御菊は涙を流す

涙流して我が家を出て

夫の源左に打向いっつ

聞いてたもれよ妾の事

親に是非無いわびでと言えど

わしが言う事其訳立たぬ

聞いて別れて 夫持つよりも

御前の手に掛け殺してたもれ

話合きめて我家に帰る

そこでお菊は心中の支たたく

御所白木にほうかけ髪に

右の源左と手を引き合うて

心中心と其の道話

杉の下にと立ちやすらいて

やがて並びて諏訪御神（長田神社）

不浄嫌いの其の御神へ

助けたもれよ立退きたもれ

やがて流行の花ごさはえて（晴えて）

銚子盃早取り出し

さしつさされつ飲む中に

娑婆を別れの夜明けの鳥

鳴くに驚き銚子を止めて

西に向いて弥陀釈迦如来

三度念仏となえる中に

二尺七寸スラリと抜いて

お菊の小胸を二刺止むる

そこでお菊は空しく消ゆる

返す刀で我身の自害
もののあわれは源左エ門よ

大門口だもんぐち

明治のころは、神牟礼の華立神社で四月の中ん申の日
に歌われたが、その後も神牟礼では伝承され、華立神社
の祭りで歌われている。以前は恒吉、大路、紺垣、坂元
榎木段、浅井などでも歌われていたという。

三味線、太鼓、拍子木で伴奏するが、大門口は五つの
歌から構成されているようである。最初の部分を大門口
というのか、五つを含めて大門口といっているのかわか
らない。歌はそれぞれ独立しており、一番目の新四郎さ
んとおすえさんの数え歌は、それだけ歌われている所が
多い。

大門口の意味は歌詞の不明もあり、はっきりしない
が、「ほんさんしのぶ」とか「薩摩新橋」の内容も合わ
せ考えると、鹿児島市内の大門口（昔遊郭のあった所）
あたりで歌われた歌かも知れない。

（三味線、太鼓、拍子木の前奏）

（一）大門口からかくまりふみだすむじょうにさっしやげて

ふしぎとしのんでしので それはずさん何ちや
チャンチャラチャチャチャチャチャ
チャンチャラチャチャチャチャチャ

（間奏）

「新四郎さんとおすえさん」の数え歌（前述）

（間奏）

ほんさんしのぶは闇がよい

月の夜はこちや頭がぶうらい さあらいと
こちや頭がぶうらい さあらいと あちやえこちやえ

（間奏）

くわんす（鐘子）のたぎる音をきけば

ソマのがんぶく思い出す あれなあ これなあ

えいえい さあさあ

（間奏）

薩摩新橋や唐金のきぐし 唐金のきぐし（きぐしは擬宝

珠と思われる）

潮にうつして いやー桜島

ささやとこよいやな よいやな

（間奏）

後は即興で何でも歌う

（奥野ミサオさん）

馬方歌

婚礼の場合に仲人等が歌うもので、現在でも一部に歌われている。これは三部に分かれている。

1 婚礼の座で歌うもの(仲人)

うれしよめでたの若松様よ

枝もさかえる葉も繁る

△又は▽

貰た貰たよよか嫁貰た

枝もさかえる葉もしげる

2 道具を引渡して貰う時(道具持ち)

ここの長持ち受け取りました

二度とかえしやせぬこの長持ちを

△又は▽

たもれたもれよ長持ちたもれ

二度とかえさぬこの長持ちを

3 嫁を連れて帰りついた時(仲人)

今朝の六ツ出て今こそ帰る

家のかかさん塩出したもれ

(梶ヶ野八木直助・坂元福九政吉氏)

恒吉の馬方

(ムコ)

ここにこの座は祝な座敷

こがね花咲くきんがなる

床に床松座敷にさかつき

よめをとりたら(さて)にぎやかに

後もさかえれまた行く先も

末は鶴亀五葉の松

(ヨメ)

内の母親三日でござる

三日立つときやまたお目かかる

座敷立つときや涙で立つが

まごえこゆればうたで立つ

(恒吉野町・永田国義氏による)

棒踊

梶ヶ野棒踊り

毎年四月十五日馬頭観音祭の時踊っていた。終戦後途絶えてしまったが、昭和五十九年復活し、保存されている。

由来については明治十五、六年のころ、梶ヶ野に新田(昭和十四年完工の松田開田以前)のため、来ていた川辺の人が、部落に教えてくれたものである。

踊り子は男六人一組となり、浴衣に白ズボン下、脚絆鉢巻たすきのいでたちで、中二人が六尺両側四人が三尺

の檜棒で踊る勇壮な踊りである。

後立ちは榊又は椿等の木で地を突きながら歌う。歌の文句は次のとおりである。

おせろが山は山が栄える

今こそ神にものみいる

焼野のきじは岡で住む

清めの雨はばらばらと吹き通す

あがいと風の風はそよそよと吹き通す

このほか色々歌の文句は作られたらしい。

(以上梶ヶ野の八木直助、八木助左エ門氏による)

折田地区棒踊り

笠抵神社に奉納されていた折田地区の棒踊りは、明治二十八年頃、伊集院から馬喰で来ていた三五郎という人が教えたものである。

六尺棒一組六人で踊るもので三尺棒は使用しない。町内浅井部落にもこの三五郎が教えた(小浜甚太郎氏談)。一説には塩売りが来て教えたとも言われる。(田代時行氏談)。歌の文句は「おせろが山」の一節「焼野のきじは岡で住む」だけのようで、現在も畜産グループによっ

て踊りつがれている。

上坂元地区棒踊り

小川(国分市)から塩売りに来ていた新兵衛という人がこの地区に教えて蹲踞神社に奉納された。安政元年にはじまったといわれる。

六尺と三尺六人一組で踊るもので、梶ヶ野と同型である。



棒 踊 り

歌

おせろが山は前は大川

焼野のきしは岡の背にすむ

山太郎がねは川の瀬にすむ

いまこそ通るは神にものめい

娘が〇〇はむこがなぐさむ

(上新坂元、上村善右衛門、小浜貞夫氏談)

なお、坂元方面の棒踊りは、飛佐、榎木段、中坂元、

上坂元、神牟礼などにあつた。

中坂元の剣舞

西井田清が海軍に入隊していた時、習ってきて部落で教え蹲踞神社の祭りや、お寺の四月八日の祭で舞うものであつた。一時途絶えていたが再開し、昭和六十三年四月、早馬神社の祭で舞つた。詩吟(題不明と川中島)と博多節(児島高德の故事に民謡がまざつたもの)を舞つて後、日露戦役の歌を舞う。歌は中絶のためか一部意味不明の箇所もある。

日露戦役の歌 (扇と刀使用、二人一組で舞う)

盃手に持ち見渡せば 霞か雲かはた雪か

軍旗たなびく奉天も 明日は乗取るあの城を

勇み勇んで飲む酒は 実に甘露の味がする

やがておさが廻り来て 鉄砲枕に草の床

そよ吹く風も君の為 降りくる雪も国の為

敵は大国ロシアの国 もとより仁義の我が軍は

勝利あるとは知りながら お国に生れしもののふが

これを見捨ておかれよか 今朝が今朝とて新聞で

お天子様のお勅諭を 読んで思わず涙が出づ

秋の長夜のそのままに 夢かうつつか幻か

頃を計りてどんと一発の 驚き騒いで起きれば

合図は進撃ラッパの音 場所はだいちせんとうせん

心も晴れて勇ましく こんな男に候えど

事ある時は尽しがた わが隊長の命令は

前面の敵兵約二千五百名 打て

煙の幕も引降し 黒き煙もろとも

打ちつ打たれつ進み行く

要塞堅固の奉天も 四方八方に取り囲む

打出す大砲速射砲 音は山河に鳴り響く

総攻撃のはげしさに 彼我の死傷の数多し

地の利を占めたる敵兵も 忠勇義烈の我が軍の

勢いなるに耐えかねて 城の上白旗の

立ちしをながめし我が兵は しばらく進撃を見合わせて

敵の挙動をうかがえば ちの道を開いてのがれんと

にわかに駆け出すロシヤ兵を 逃さずばすくなく打倒す
音に聞えし奉天も またたく間に打倒す
日本軍大勝利大勝利 (森山時澄氏)

青松段の剣舞

月野の青松段では大正十年ごろ、松山の清はる(又は清たけ)から上野藤吉等が手ほどきを受けた剣舞は二人一組で舞う。筒袖の着物に袴で、たすきを掛け、太刀と扇子を持った。囃子には三味線、太鼓を使用する。月野は六組に分かれていたが、太田神社の四月三日の大祭では組別に踊を奉納したが、青松段の剣舞も奉納された。月野小学校の落成式や、町福祉大会などでも披露されている。

内容は曾我兄弟の仇討物語である。

富士の巻符曾我物語 さても二人のいでたちは
母の賜いし小袖をば たすき十字にあやどりて
互いに松明振りかざし 仇工藤の仮屋をば
探せどいかに人はなし 如何はせんとたたずめば
おりしも見ゆる灯に 陰に二人は身をひそめ
見ればあだたる美人なり 声を導に兄弟は
祐経いずこと分けて行く 知るや知らずや左衛門は

前後も知らず臥してけり 十郎五郎に討てという
五郎は兄に譲るなり 十郎すかさず肩を切る
五郎もつづいて首を切る 十八年が父の仇
ここに晴らすぞ愉快なり いざこの上はどこまでも
刀の目釘のつづくまで 切り死なさんと高々に
(十郎)

やあやあ遠からん者は音にも聞け
近くば寄って目にも見よ
かく申すそれがしは河津の三郎祐泰が
忘れ形見の曾我十郎祐成
(五郎)

同じく五郎時致

日頃仇とつけねろう
仇工藤左衛門祐経討ち取りたり

我と思わん方々は皆討取りて高名あれ
(二人)

兄弟相手になり申さん 出会え出会えと呼ぶ声は
富士の裾野に伝わりて 幾百年かその間
永く歴史に伝わらん 荒きんぼきんぼ愉快愉快
(上野藤吉氏)

角力取り節

昭和初期ごろまでは、岩川、菅牟田、坂元などでも見

られたそうだが、いつしか途絶えてしまった。大路ではこれを復活保存しようということで、柏木イツ子を中心に保存会を結成し、昭和四十五年、早馬祭で踊り、弥五郎どん祭や県の農業の振興大会の時など披露した。保存会員は現在（平成1）十三名である。

大路角力取り節

(一) サアーハエー角力にや負けてもけがさえなけりや

サアーハエー晩はわたしが負けてやる

(二) サアーハエーやぐら太鼓にふと目をさまし

サアーハエー明日はどの手で投げるやら

(三) サアーハエーなごじやなごじやよ今夜ぎいのなごじや

サアーハエーみんな歌てやれお客様

(四) サアーハエー逢うて嬉しや別れのつらさ

夢でお顔をヨイシヨ見るばかり

「大阪でんまのまん中で から傘枕でやっとけた

おどんな知っちゃっても 云われんどん」

（柏木イツ子さん）

太鼓 踊

各地区に太鼓踊があったが、神社の祭りや学校の落成



太鼓 踊り

式とか大きな行事で踊られたものであった。特に千ばつの年の雨乞いに踊られるもので、昭和九年の千ばつの夏、神牟礼や飛佐の太鼓踊が雨乞いのために舞われていた。

須田木にもあった。下須田木の田脇正吉氏（明治18生）の話によると、青年時代、日露戦争の凱旋祝の時踊ったのが最後であったという。

太鼓の方は白緋白股引で、背のやばたは一間半もある長いものであった。鐘打ちは湯衣のこともあったが、大ていは黒紋付であった。頭に花笠を冠ったが、陣笠の時もあった。鐘打ちは腰に小刀をさした。

須田木の歌の文句は次のようなものであった。

春は桜の木のもとに 花をながめて面白や

秋はさよかれ月を見る 月を眺めて面白や

冬は雪霜霰降る 雪を眺めて面白や

「高城わかし」というのは、あまりに烈しい踊りなので、他の人の太鼓を破るからと稽古しなかったという。

その「高城わかし」の一節

ホーホー高城わかしは春山しょうおさき

二番にほそしはなしおろそうおさ

飛佐の歌の一節

向かえの野辺

向かえの野辺に啼く鈴虫は

暑さに啼くか寒さに啼くか

朝草刈りの目を醒ます

箱根八里

箱根八里は駒でも越すが

越すに越されぬ大井川

神牟礼の太鼓踊りは、昭和九年の干ばつの時の雨乞いで復活したが、四月の華立神社（早馬さあ）に奉納して

いた。

四十九年町指定文化財となり、岩川夏祭りや弥五郎どん祭りに踊っているが幕末のころ、にしかた（薩摩半島）の人から習ったと伝えられている。

太鼓の服装は、長袖繻絆に股引、紫の脚絆に白鉢巻、矢旗は三本で、真中の棒は竹へぎを何本もつけ、色紙を貼りつける。鉦の服装は紋付袴で、花笠を着けるが、花笠は細長い紙を周囲に垂らし、後部には五色の紙垂を垂らす。

踊りは道鉦みちがねで全員縦一列、先頭の四人が鉦で、太鼓が続く。境内につくと縦二列になり、鉦は列の先頭にそれぞれ分かれる。踊りながら円陣になり、内の鉦の輪は左廻りに外の太鼓は右廻りとなる。二列と円陣の変化が三回繰り返されるが、内陣の時歌が入る。

(一) 木戸の鳴るまを見てやれば、木戸は鳴やせし竹の友杖、おたねこそおる

(二) これのお庭を見てやれば、さてもお庭はやら見事、あおいの松に黄金花咲す

(三) これのお庭の三本榎、えの実ならず花が咲く、これも殿様のふくよほのぎ

この歌は、念仏系の近世風流踊りに由来すると下野敏見氏は言っている。

奴踊り

月野の藤ヶ峰に奴踊りがあるが、これは大正十年頃村上与左衛門、篠田貞蔵が松山村豊留部落から習ってきて踊りつがれた。太田神社の四月三日の大祭の他、中学校落成式や岩川覚照寺落成式でも披露されたが、太平洋戦争で中断し、昭和五十四年復活された。再度中断したが、五十九年復活した。

三味線、太鼓で、踊子は、横鉢巻、赤タスキで背に数色の長布を垂らし、赤腰巻の格好で、扇子を使用する。

奴踊りの唄

(出張イ)

トントントン トンカッカ
トントントン トンカッカ トントントン トンカッカ
トンカラカッカ トンカッカ トンカラカッカ トンカッカ
トンカッカ トンカッカ
(ハ) スヤマオカメジヨハ スヤマジャ オヤマジャ
ナツイカメジヨ オタイシヨウネ コリヤ
オセダセバ ホンニゲナオナゴ

(二) 伊勢ニヤエー 七度 熊野ニヤ三度

ヨイセノトコセ ササヤトコセ

セノヨイヤナ ハレワイナ コレワイナ

セセ ナンデモセ

(三) 空高イ丘カラ ニギメシガゴロダナ

鳥ヤ喜ブ ワシヤヒダリナ

(四) 河原サホイナ 通レバ

ケサヨサンガマネグ ハレワイナコレワイナ

ケサヨサンガ話サレ ヒマガイル

遅イト呼ンデ シカラレノ ドッコイ

(五) イタコオ出島ハ サテ色所

ソラ腰出シャモンバデ ナカヨシノ

シャレタ顔シテ ヨシナサレ

シロチャ ヤمامィチャ デンマガチャヤ

ソラ シンキモ ジョロシヤモ ハナヤカニ

(控)

ア ドッコイ トンチャコ チャンチャン

モ一ツ トンチャコ チャンチャン

トンチャン トンチャコ チャンチャン

トンチャコ チャンチャン

トンチャン チャンチャン トンチャンチャンチャン

トンチャコ チャンチャン

月野

昔は月野を六組に分け、旧正月の中の卯には棒踊を太田神社に奉納した。旧八月十一日には太鼓踊を中野に踊庭というところがあって、そこで踊った。

昔は棒踊、太鼓踊、盆踊（手踊）など一定の時期があったが、その後棒踊は各方向の随意奉納となり、太鼓踊は各方向で踊った。盆踊は一種の豊年踊となって、方向で踊っていたがその後なくなった。

〔月野村史〕

荒谷

荒谷には昭和の初めごろまで八月踊があった。

棒踊もある。六尺と三尺棒である。昭和十年ごろまでやった。

飯田

飯田には「口説」^{くどく}「はんや節」などがある。口説は「恒吉口説と同じである。はんや節は「はんやはんやで今朝出た船は、どこの港についたやら」その他で、一般にうたわれているものである。飯田の歌はまだ外にもあり録音を聞いたが、文句がはっきりしないので記録出来なかつた。

つた。

駒山節

一月 梅に鶯街道の松にや

風が琴ひく春の音

二月 伺う野原の焼野のあとに

わが子恋しと雉がなく

三月 み山桜に野原のつつじ

小歌心でわらべとる

四月 かんばんでらから新田見れば

今はれんげの花盛り

五月 田植男の蓑笠姿

錦着る日のたねを蒔く

六月 昼の仕事に出したる汗を

晩に流そや川ばたで

七月 稲にや穂が出る朝夕の風に

なびく田んぼの景色のよさ

八月 いつも十五夜の夜はごくらくと

暮す心に雲はない

九月 今年や豊年黄金の色に

実る日毎の宝草

作詞 川畑 篤恭
曲づけ 篠原熊太郎

十月 小春日和にいね刈上げて

ほす間ほす間に麦つくる

十一月夫婦揃っていねこぐ時にや

君の御恩が有難い

十二月沖を離れてこの山里に

心しずかの春を待つ

この節は、慶応大学在学中の恒吉出身の川畑篤恭が
(後に慶応大学英文学教授となる)折田の駒山新田四町
歩が完成した頃、それを祝って作ったものである。

鍋の牛踊(べぶ踊)

この踊は大正末期、笠木原開田祝賀の時、鍋青年団が
末吉町高松から習って踊り初め、その後数回踊ってい
る。踊る人は何人でもよく、男女混じった方がおもしろ
い。牛になる人、農具をもつ人は、紺の法被、足に脚
絆、女は紺のもんべに手甲。農具は鋤、鍬、大鎌、草刈
かご。踊りの用具は全部揃えてある。

(東鍋、益永甚蔵氏による)

大隅音頭

石本美由起作

一、川とみどりの大隅みたさ

窓の向うに背のびする

あれは霧島 桜島

ヨカヨカヨカトコ 大隅ヨカトコ

ヨインヨ 弥五郎どん音頭とる

二、岩屋観音 大鳥峽は

めぐる名所の新コース

川の流れがガイドする

三、町は岩川官軍墓地に

咲くは勲の名残り花

明治偲べと風が吹く

四、おれは恒吉 あの娘は月野

なさげ大隅 野山こえ

想い通わすバスもある

五、投谷八幡乳のみ見つれて

お礼参りの大銀杏

お家繁昌の葉もしげる

六、草の海やら国営牧場

牛もアベック 親子づれ

冬は白サギ会いに来る

七、草も眠るか五輪の塔よ

山の風にも景清の

声がするよな柳井谷

八、おどり上手は大隅育ち

まるい心の輪になれば

ごらん稲穂もおどり出す

△この「大隅音頭」は昭和四十三年、岩崎与八郎氏が、石本美由起氏に大隅町へ来てもらって、作詞を依頼されて、出来たものである。▽